



まゆ きぬ
繭と絹

歴史と文化で
まちづくり

はじめに

日本の蚕糸業には2000年近い歴史があります。

養蚕が中国から伝来したのは弥生時代と言われており、中国の史書「魏志倭人伝」には邪馬台国の女王卑弥呼が3世紀に魏の国王に絹織物を送ったことが記されています。また、聖徳太子の「十七条の憲法」には農桑（農業と養蚕）の重要性を述べた規定があり、日本書紀や万葉集には養蚕をモチーフとした歌が数多く収録されています。

奈良、平安時代には、絹は貴族の和風の衣服文化には欠かせないものとなり、鎌倉時代から戦国時代にかけては、戦乱により全国的に絹織物の生産が減少しましたが、武将の装束に加えて能装束や茶の湯など新たな絹の需要も生まれました。

江戸時代は、全国各地で藩財政の基盤として養蚕業、織物業が振興され、地名を冠して〇〇織、〇〇紬などと呼ばれる有名な織物産地が数多く生まれた時代でした。

幕末の横浜開港（1859年）から昭和初期までの75年間、生糸は終始日本の最大の輸出品目となり、生糸の輸出で得られた外貨は、欧米から工業製品や機械を輸入する原資となって、蚕糸業は日本の近代化、工業化の財政的な基盤となりました。1909年には日本の生糸生産量は中国を追い越して世界一となり、日本の蚕糸業は黄金時代を迎えました。

しかしその後、1929年の世界恐慌による生糸価格の暴落、太平洋戦争を経て、ナイロンなど安価な化学繊維の普及、海外からの生糸、絹製品の輸入増加などにより、日本の蚕糸業は衰退の一途をたどります。

全国各地には、今でも江戸時代から明治時代にかけての蚕糸業にかかわる有形、無形の文化遺産が数多く残されています。そのような文化遺産を活用して、観光客を招致したり、様々なコミュニティ活動を行うことを通じて、まちづくりを進めている地域があり、今回、このような各地の取組みを収集し事例集として刊行することとしました。

全国各地で、この事例集も参考にさせていただき、より多くの地域において蚕糸業を核とした地域づくりの取り組みが行われるようになることを願っています。

現在、養蚕農家はわずか130戸余りにまで減少してしまいましたが、このような蚕糸業を核としたまちづくりの取り組みがさらに広がり、また、多くの方にこの事例集をご覧いただいて、国産生糸の歴史的、文化的な価値が再認識され、国産の生糸を使用した絹製品を購入していただくことを通じて、今後とも、日本の蚕糸業が持続的に営まれていくことを期待しています。

最後になりましたが、改めまして、本事例集の作成にご協力をいただきましたシルクのまちづくり市区町村協議会の関係者の皆様、各事例をご執筆いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

令和7年3月

一般財団法人 大日本蚕糸会
会 頭 松 島 浩 道

目次

取組み内容の分類



蚕糸絹業関連歴史遺産を保存・継承する取組みを行っている地域

静的遺産：群馬県 富岡市、埼玉県 本庄市、兵庫県 養父市、福岡県 大野城市

動的遺産：長野県 岡谷市、長野県 駒ヶ根市、滋賀県 長浜市、愛媛県 西予市



地場の織物産業を通じた地域おこしや産業の活性化への取組みを行っている地域

栃木県 小山市、東京都 八王子市、新潟県 南魚沼市、山梨県 西桂町、京都府 京丹後市



養蚕の新しい可能性とその担い手に期待する取組みを行っている地域

山形県 白鷹町、群馬県、群馬県 富岡市、長野県 駒ヶ根市、京都府 京丹後市、兵庫県 養父市、愛媛県 西予市

取組み事例

山形県 白鷹町	しらたか天蚕ものがたり	4	
栃木県 小山市	小山市産本場結城紬による持続可能な地域づくり	6	
群馬県	群馬県の養蚕担い手育成対策	10	
群馬県 富岡市	「養蚕業の維持」を地域振興の柱に据えた多彩な取り組み	12	
埼玉県 本庄市	本庄市を紡いだ養蚕文化を後世に伝える取組み	16	
東京都 八王子市	日本遺産のまち「桑都・八王子」の魅力の世界へ	18	
新潟県 南魚沼市	地域の無形文化を次世代へ継承	20	
山梨県 西桂町	郡内織物を活用した二つの取組み	22	
長野県 岡谷市	岡谷シルクを核にした地域活性	26	
長野県 駒ヶ根市	シルクミュージアム発信による新たなカイコ活用プロジェクト	30	
滋賀県 長浜市	紡ぐ過去、繋ぐ未来 おと 大音の糸取り物語	34	
京都府 京丹後市	伝統産業の再構築と新たな産業の創出を目指して	36	
兵庫県 養父市	日本近代養蚕業の父、上垣守国と養父市養蚕プロジェクト事業	38	
愛媛県 西予市	伊予生糸をつなぐ いよいと	40	
福岡県 大野城市	筑紫郡大野村の養蚕	42	

取組み地域一覧図

東北

山形県 白鷹町

信越

新潟県 南魚沼市

長野県 岡谷市

長野県 駒ヶ根市

関東

群馬県

群馬県 富岡市

栃木県 小山市

埼玉県 本庄市

東京都 八王子市

山梨県 西桂町

近畿

滋賀県 長浜市

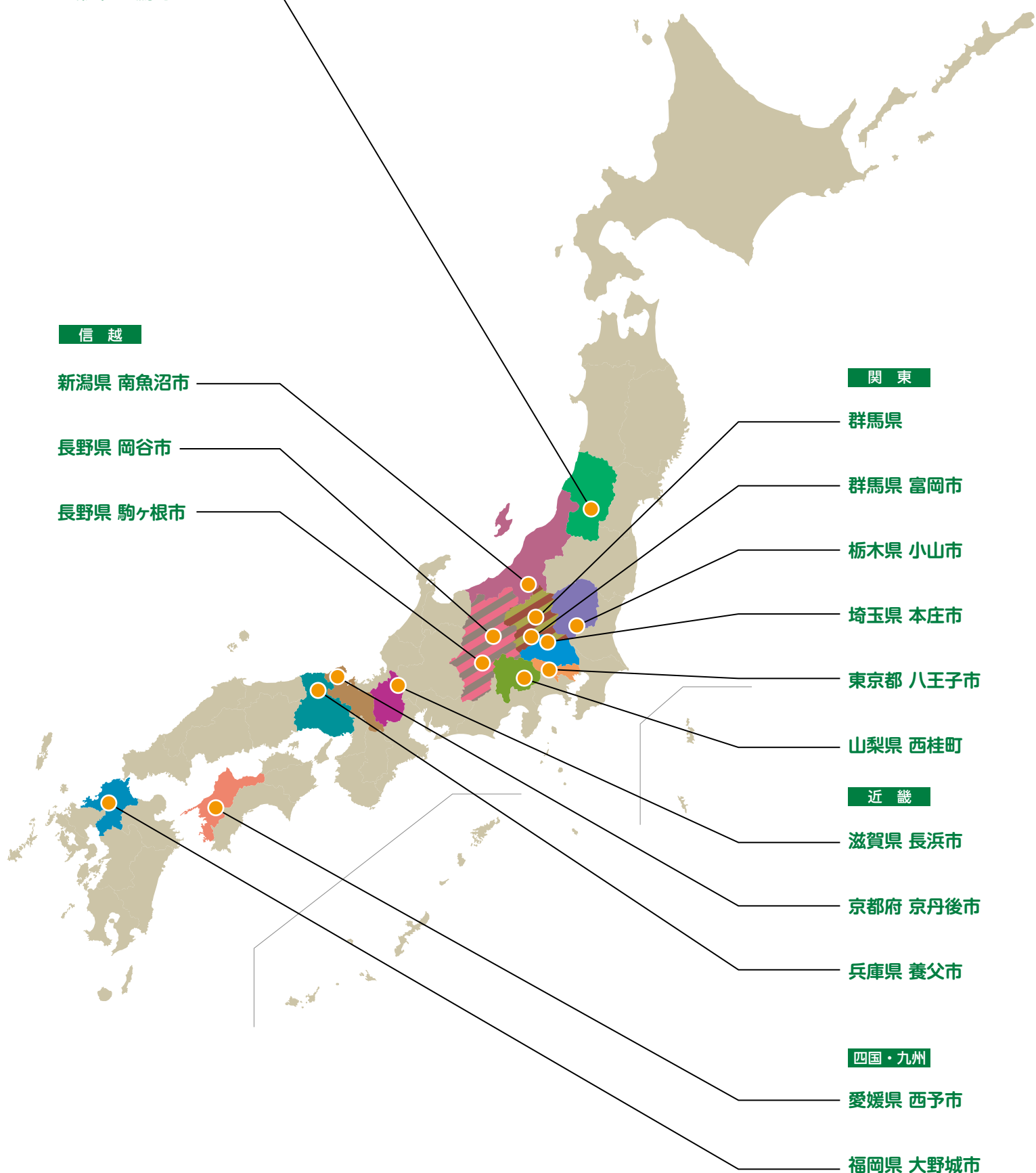
京都府 京丹後市

兵庫県 養父市

四国・九州

愛媛県 西予市

福岡県 大野城市





しらたか天蚕ものがたり

しらたか
山形県 白鷹町

取組みの背景・経緯

1 養蚕の町

山形県南部のほぼ中央に位置するここ白鷹町では、古くから養蚕が盛んに行われ町内ほとんどの農家で蚕を飼って製糸や織物が行われていました。社会情勢の変化により養蚕は衰退の一途を辿ったが、かつては町全体での売り上げが8億円にまで伸びた養蚕の町です。町内には現在も「蚕桑^{こぐわ}」という地名が残っています。

2 天蚕繭の生産

その白鷹町の深山^{みやま}地区で「天蚕^{てんさん}」^(*)が飼育されています。より希少価値のある「天蚕」を生産しようという取組みが始まったのは平成元年です。農家の副収入を上げようという目的のほか、過疎化が進む町での「地域づくり」としての取組みでもあります。区の役員と元養蚕農家等で天蚕飼育組合を組織し、圃場にクヌギを植え、繭の生産を行ってきました。

*1：日本固有の野生の蚕。絹糸よりさらに軽く、柔らかいため、高級素材として扱われている。

3 特産品を再び

平成19年、元養蚕指導員や米琉織物^{よねりゅうおりもの}^(*)工業協同組合が会員となり、新たに「しらたか天蚕の会」として活動を始めます。当時は生産した「繭」を販売しており、平成20年から東京の呉服店に繭を購入いただきました。

平成24年、天蚕の飼育をしても商品がなかなか売れず、飼育を辞めようかと話し合いになったこともありました。繭を買い取ってもらうだけでは、飼育にかかる人件費は時給300円にもならないため、繭として売るのはではなく以前のように、ここでしか作れない特産品として付加価値をつけて製品を販売しようと今後の活動について話し合いを続けました。話し合いの結

果、織りの技術も残るこの町で天蚕の飼育から紬を織りあげるまでを一貫して行う「オール白鷹」として再挑戦を始めました。

そんな会の活動を理解してくださったのが以前より繭の販売先であった呉服店の社長です。社長から頂いた「白鷹産にこだわった商品づくりに協力したい。白鷹ならではの一反を作りましょう。売れる商品づくりをしましょう」という言葉が、どれほど会員のやる気になったことか計り知れません。

*2：別名「白鷹板締小紺」精緻な小紺模様の織物。

取組みの内容

1 天蚕の飼育

雪解けを待ち4月になると作業が始まります。飼育担当の会員が20アールの圃場に施肥を行い、圃場内の草を刈り、整備作業を行います。

6月中旬には、保存しておいた天蚕の卵をクヌギにつけてふ化を待ちます。天蚕糸で一反を織るには約4,000～5,000粒の繭が必要です。

幼虫が繭になるまでの間、草刈り等の圃場の整備を行いながら日々の巡回で幼虫の保護を行います。



天蚕用の網室を設置中の会員

2 天蚕観察会

7月下旬には、町内2小学校の3年生を対象に天蚕観察会を行います。「蚕桑」の地名が残る蚕桑小学校の3年生は、かつて地域で盛んに飼われていた「家蚕^{かさん}」^(*)を学校で飼育しています。自分たちが飼育している家蚕とは違い、緑色の天蚕はクヌギの葉と同化しているため、子供達は目を凝らして天蚕を探します。目が慣れてくる

と幼虫を見つけては「先生、ここにもいるよー。」蚕の先生（飼育担当の会員）に「どうして緑色の蚕なの?」「どうして逆さまにぶら下がっているの?」といった質問が出ます。



天蚕観察会に参加した子供たち

貴重な「天蚕」がここ白鷹町で飼育されていること、その天蚕から特産品として「白鷹天蚕紬」が生産されていることを子供達にも知ってもらえるよう、観察会は毎年実施しています。

*3：農家で飼育される家畜化された蚕。野外では生息していない。

3 繭の収穫、翌年の生産に向けて



結繭した天蚕繭

観察会が終わると7月下旬から8月上旬にかけて繭の収穫の時期です。繊細な天蚕の飼育には細やかな配慮が必要で、労力を惜しまず飼育作業を続けてき

た会員にとっては、大きな繭を収穫できることが何よりの喜びです。繭の収穫を終えたお盆過ぎには、圃場がある敷地内で収穫祭を兼ねた生ビール会を開き、今年の飼育の苦労などを話しながら次の作業となる繰糸担当に引き継ぎます。

翌年の生産に向けて卵の保存や、ここ深山地区は、多いときには2メートル近くのスユが積もる豪雪地域のため圃場を囲ったネットの取り外し作業を行います。

4 繰糸作業

繰糸（*4）作業を担当するのは手先の器用な女性会員です。自分たちで糸をとり繰糸の技術も残していこうと3人が習って技術を習得しました。糸とり作業での切れやもつれを防ぐ



機織りの様子

ため繭を煮てお湯に浸し、ひとつひとつ紡いでいきます。

会員の町内織物工房が紡いだ糸で最後の織りを担当します。天蚕糸の性質上どうしても毛ばだっしまい、毛ばだちを一本一本丁寧に直しながらの機織りのため技術を要し時間がかかります。

*4：繭から糸をとって生糸にする作業

取組みの効果、課題とその解決に向けた今後の方向性

本町は多くの歴史的、伝統的な文化財が受け継がれており、養蚕と白鷹紬は特徴的な地域資源のひとつです。また、養蚕から織物にいたるまで、昔ながらの技法で、一貫体制がとられている地域は全国に類がなく、板締めという手法により精密に染めていく技法は、県の文化財として指定を受けています。

現在、会員15名で活動しています。会員の高齢化などの課題もありますが、町の補助事業等を活用し、後継者の育成支援、経費補助を受けながら、途絶えることなく残すことができています。自分たちの手で生産した天蚕糸が着物になりお客様の元へ届くことを何よりの喜びとして「白鷹天蚕紬」をお届けできるよう、会員一同で研究を重ねていきます。



「しらたか天蚕の会」のみなさん

活用した助成事業等

- (1) 伝統的工芸文化人材育成事業（町単独）
- (2) 伝統工芸技術保存支援事業（町単独）

問合せ先

 **白鷹町** 山形県白鷹町
白鷹町役場 商工観光課
しらたかまち / Shirataka Town

〒992-0892 山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥甲 833
電話：0238-85-6126
メールアドレス：shoukou@so.town.shirataka.yamagata.jp



小山市産本場結城紬による 持続可能な地域づくり



おやま
栃木県 小山市

取組みの背景・経緯

結城紬の歴史

栃木県小山市の東部は養蚕が盛んで、桑畑・絹村と呼ばれていました。桑畑が広がり、農家では蚕をお蚕様と呼び大切に育て、真綿から糸を紡ぎ、その副産物として織られていた「本場結城紬」は、鬼怒川流域の栃木県小山市や茨城県結城市周辺で主に生産されている伝統的絹織物です。糸つむぎ^{かすりくぐ} (*1)、緋括り^{かすりくぐ} (*2)、機織りのすべてが手作業で作り上げるからこそその温かさや軽さ、着心地の良さに定評があります。

結城紬の起源は、『常陸国風土記』に記されている絹織物に結びつくと言われています。結城紬と呼ばれるようになった時期や背景は諸説ありますが、一説には、室町時代に結城地方を治めていた結城氏の名をとったとも言われています。その後、江戸時代初期に代官になった伊奈備前守忠次が信州上田から染色や柳条^{しな} (*3) の織法を導入したことにより、結城紬の名は一層高められ、江戸時代末期には緋の技術を取り入れ、試行錯誤を繰り返しながら精巧な緋柄の結城紬が生産されるようになりました。



結城紬の着物

現在、本場結城紬には検査があり、長さ、打ち込み数^こ (*4)、色斑の有無や堅牢度など15項目の規定を満たしたものにのみ合格証と検査之証が貼付されます。

伝統の技術を継承した結城紬は、「重要無形文化財」に指定されており、製作には数多くの工程がありますが、その中でも

- 1 「糸はすべて真綿から手つむぎしたもの」
- 2 「緋の模様をつける場合は手くづり^て (*5) によること」
- 3 「地機で織ること」^{じばた}

これらの3つの工程が指定要件とされています。



結城紬の反物

- *1：手作業で繊維を撚り合わせて糸にする作業
- *2：柄になる部分を木綿糸でしばって防染した後に染色する技法
しばられた部分は染色されないため模様ができる。
- *3：細綿を立体的に織り出した紋様^{たていと よこいと}
- *4：織物の一定の長さの間に織り込まれる経糸と緯糸の密度のこと。
密度が高い(=糸の本数が多い)とハリやコシが強く、丈夫な生地になる。
- *5：手つむぎ糸に防染用の木綿糸を巻きつけ括ること

取組みの内容

- 昭和31 (1956) 年 国の重要無形文化財に指定
- 昭和52 (1977) 年 国の伝統的工芸品に指定
- 平成22 (2010) 年 ユネスコ無形文化遺産に登録
登録を契機に「きものの日」を開催
- 平成23 (2011) 年 「小山市結城紬購入費等助成制度」を導入

平成26（2014）年 市職員として紬織士という職種を
新設採用



紬織士（市職員）の作品

平成28（2016）年 「おやま本場結城紬クラフト館」
オープン



令和元（2019）年 「桑・蚕・繭・真綿かけ・糸つむ
ぎのさと」 オープン

令和2（2020）年 「NPO法人糸つむぎ・真綿かけ
の伝統技術を守る会」 発足

取組みの効果

1 経済的效果

原材料不足に悩んでい
る織元に対して、「NPO
法人糸つむぎ・真綿かけ
の伝統技術を守る会」が
作成した真綿を供給でき
るようになりました。

社会福祉施設におい
て、桑の葉や繭を使った
商品の開発・販売に取
組んでいます。

2 社会的効果

「NPO法人糸つむぎ・
真綿かけの伝統技術を守
る会」が、真綿かけ、糸
つむぎ講習会を開催し、
技術を習得した受講者が
同NPO法人に加入して、



「NPO法人糸つむぎ・真綿かけの伝統技術を守る会」の活動



着心地体験教室の様子

後継者として小山産繭を使用した真綿の生産に携わっ
ています。

結城紬の生産地である小山市と結城市が「きもの
ウィーク」として、お互いのきものイベントに市長を招
き、両市民も参加して交流を図っています。

また、小山市と栃木市が、両市の「きもの日」に
和装文化を通して交流を図っています。

3 文化的効果

産地の絹地区にある小中一貫教育の絹義務教育学
校の1・2年生が、JAおやまの協力のもと、蚕を育てて
います。

小中学生等を対象に本場結城紬の生産者の方やNP
O会員の方を講師に迎え、真綿かけや糸つむぎの体
験教室を開催しています。

本場結城紬の着心地体験教室を開催し、本物にふ
れることで良さを実感していただいています。

産地である栃木県小山市と茨城県結城市の中学生
が合同で参加する着心地体験教室を開催し、交流を
図っています。

令和5年度の参加実績

小学校6校	333人、	中学校3校	322人
糸つむぎ体験	12人、	講習会	延べ69人
真綿かけ体験	19人、	講習会	延べ30人



4 小山市産業観光部 工業振興課 結城紬振興係の取組事例

(1) おやま本場結城紬クラフト館

JR小山駅西口にある「おやま本場結城紬クラフト館」を小山市が誇るべき伝統産業の情報発信拠点として位置付け、いつでも、本場結城紬の着心地体験やコースター織り体験に参加できます。



おやま本場「結城紬クラフト館」展示：地機



おやま本場「結城紬クラフト館」展示：衣掛け



おやま本場「結城紬クラフト館」展示：コースター織

(2) 結城紬継承のための計画策定

令和5（2023）年に、本場結城紬の技術の継承を重点課題と捉え「小山市本場結城紬未来継承ビジョン」を策定し、未来にむけて持続可能な結城紬を目指しています。

(3) 「小山きものの日」を毎年11月に開催



小山きものの日の様々な行事

令和6年度には、次のようなイベントを開催しました。

1：絵画アートとのコラボレーション

地域おこし協力隊員がSNSを介して交流した、海外在住の絵画アーティスト SHISHIDOMIA（シシドミア）さんの描くキャラクターと結城紬のコラボレーションとして、市内の4カ所を背景に着物にスニーカー、パーカーや小物を取り入れて四季ごとにかわいく着こなすキャラクターを描き下ろした絵画展を開催しました。



2: スンプラリー

浮世絵版画のように重ね捺しすると、キャラクターが描かれたイラストが完成するスタンプを作成し、市内のラーメン店・ハンバーガー店・スケートボード店・神社に協力をいただき、まちなかを巡りながら4カ所を回ってもらうスタンプラリーを実施しました。

3: ミニファッションショー

公募した市民のみなさん、連携協定を結んでいる大妻女子大学の学生及びスタンプラリー協力店舗関係者によるファッションショーを開催しました。正統派の着こなしから、リメイク、洋装との組み合わせ、個性的な着こなしなど多様なスタイルに観客のみなさんから歓声が上がりました。

4: NPOとの共催

市民のみなさんとの共催として、江戸時代の豪農屋敷を活用した「門善屋」を会場に、「1日かぎりの着楽屋敷」を開催しました。

課題とその解決に向けた今後の方向性

1 生産者の高齢化と後継者不在

生産者は60代後半から70代の方が中心で、50代以下の織元はいません。生産者として登録はしているが高齢や健康上の問題で生産に携われない方もいます。

高価な絹織物として販売されているものの、作業の全工程が手作業であり、高い技術の習得までに時間を要することに加え、労働時間に対しての収入が低く、生業として厳しい環境にあるため、伝統産業の担い手になりたいと考える若者がいない状況です。こうしたことから、生産者の高齢化と後継者不在が深刻な問題となっています。

2 行政の対応

小山市では、市職員に紬織士という職種を設けて平成26(2014)年度及び30(2018)年度に各1名を正職員として採用し、技術研修や研鑽に励むとともに周知・啓発活動を行ってきました。令和5(2023)年度には、前述のように「小山市本場結城紬未来伝承ビジョン」を策定し、技術の継承のために本場結城紬の振興に取り組んでいます。

3 民間の動き

「NPO法人糸つむぎ・真綿かけの伝統技術を守る会」が、小山産を主とする繭を用いて小山産真綿の生産に取組み、一定数を供給できる体制が整いました。次なる目標として小山産糸の製作に取り組んでいるところです。

将来的には、繭・真綿・糸の全ての原材料を地産地消するとともに、民間と行政が連携しながら一丸となって、本場結城紬の生産から販売までを一貫して行える組織をつくり、これまで受け継がれてきた技術を確実に未来に継承していきたいと考えています。

4 販路の拡大

海外市場を見据えて、本場結城紬の特徴である、すべての工程が手作業で丁寧に作りあげているため非常に高品質であり付加価値の高い製品であることを認知してもらったうえで、購入し、満足して着てもらえる仕組みを構築していきたいと考えています。

活用した助成事業等

助 成	国の地方創生推進交付金
期 間	平成31・令和元(2019)年度～令和3(2020)年度
事業名	地域の未来を創る結城紬産業振興プロジェクト
内 容	●小山産繭を原材料とした結城紬新商品の開発・本場結城紬のPR展示業務委託 委託先：大妻女子大学 家政学部 被服学科 ●小山産繭の活用普及に向けた原材料(繭)の調査・研究業務委託 委託先：国立大学法人 宇都宮大学 ●観光マップ等の作成 委託先：NPO法人 糸つむぎ・真綿かけの伝統技術を守る会

※他にも事業計画がありましたが、コロナ禍に重なったことから委託業務を中心に実施いたしました。

問合せ先



小山市
OYAMA CITY

栃木県小山市
産業観光部 工業振興課
高橋 拓

〒323-8686 栃木県小山市中央町 1-1-1

電話：0285-22-9395

メールアドレス：d-kougyo@city.oyama.tochigi.jp



群馬県の養蚕担い手育成対策



群馬県

取組みの背景・経緯

蚕糸業は、群馬県の地場産業として長い歴史を持ち、日本の近代化に貢献してきました。しかしながら、時代の流れによるライフスタイルの変化、和装需要の減退、海外からの安価な生糸・絹製品の輸入による価格低迷と養蚕農家の高齢化の進展により、年々、養蚕戸数及び繭生産量が減少しております。2023 年の群馬県における養蚕戸数は59戸、繭生産量は19tでした。戦後、養蚕戸数が最も多かった 1958 年の 84,470 戸、繭生産量が最も多かった 1968 年の 27,440t と比べると、いずれも、わずか 0.07%ほどとなっています。

現在、日本一の繭・生糸生産を担っている群馬県は、今でも、蚕種製造から、養蚕、製糸、織物まで、各生産段階が地場産業として営まれています。蚕糸業は、蚕の卵（蚕種）を製造する蚕種業、蚕を飼育して繭を出荷する養蚕業、繭から生糸を製造する製糸業の3業の総称で、これらのうちひとつでもなくなれば、成り立たなくなります。

2014 年 6 月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録され、蚕糸業への注目度が高まりました。群馬県では、世界遺産の原点とも言うべき伝統ある蚕糸業を維持させ、将来の世代に引き継ぐことが必要であると考えています。

そのため、繭生産量の確保に向け、養蚕農家に対する繭価格への上乗せ補助を始め、新たな担い手を育成する「ぐんま養蚕学校」の開校、新規参入者が桑園造成や養蚕施設機材の購入に必要な初期経費の補助等による蚕糸業継承対策、製糸業の経営基盤強化対策、県産シルクの需要拡大等の各種施策を講じているところです。

今回は、群馬県の取組の中から、養蚕の担い手育成対策についてご紹介いたします。

取組みの内容

1「ぐんま養蚕学校」の開校

「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産登録された2014年以降、蚕糸業に対する関心が高まり、養蚕参入に関する相談が増加しました。しかし、養蚕参入を希望したとしても、養蚕に関する知識、経験、飼育施設、桑園等を持たない者が直ちに養蚕、繭生産を開始することは困難です。

そのため、群馬県では、養蚕の新規参入希望者を対象として、2016 年から「ぐんま養蚕学校」を開講しました。ぐんま養蚕学校では、養蚕の基本技術を習得するための理論学習や飼育実習の他、1～2年以内に養蚕参入を目指す方には養蚕農家での実践研修も行っております。また、将来群馬県内で養蚕を始めようと考えている方を対象に「ぐんま養蚕基礎講座」も開講し、養蚕担い手の掘り起こしを行っています。2023年までに、ぐんま養蚕基礎講座の受講者は156名、ぐんま養蚕学校修了者は21名となっています。



ぐんま養蚕学校での実習の様子

ぐんま養蚕基礎講座受講者及びぐんま養蚕学校修了者数

年	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	計
養蚕基礎講座受講者	24	23	13	21	13	17	16	23	156
養蚕学校修了者	8	4	2	2	0	1	3	1	21

2 養蚕参入にかかる初期経費の補助

養蚕を始めるにあたっては、養蚕資材や飼育施設・機械等が必要となりますが、現在は多くの養蚕資材等が製造中止となり、その確保が難しくなっています。そこで、市町村やJAと連携し、高齢等により養蚕を中止した養蚕農家の資材、飼育施設、桑園等の保管・継

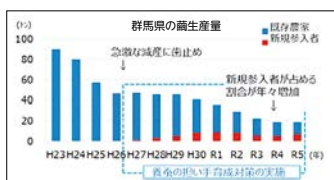
承を推進しています。

また、養蚕参入にあたっては、資材・施設等の確保だけでなく、桑園造成や飼育施設の整備等に多くの資金が必要となります。そこで、新規参入者に対し、参入にかかる初期経費について、事業費の2分の1以内で、最大50万円までの補助を行っています。

3 蚕糸業継承対策

養蚕農家が繭生産を安心して継続できるため、また、新規参入者が将来計画に基づき養蚕業に定着するためには、繭生産費に見合う繭代を得ることが不可欠です。現在、大日本蚕糸会による蚕糸・絹業提携グループへの繭代補助に加え、群馬県では、市町村と協調して、繭生産費相当の農家手取繭代を確保するための補助を行っています。

2014年度から、碓氷製糸株式会社が収納する群馬県産繭に対して繭1kg当たり300円の補助を開始しました。さらに翌2015年度からは、群馬県内の養蚕農家に対し、個々の繭生産量実績に応じて、繭代の上乗せ補助として繭1kg当たり500円～最大900円を補助しています。



新規参入者の浅井さん

取組みの効果

これらの取組以前の2014年までは、群馬県内で養蚕への新規参入者はほとんどありませんでしたが、2014年から2023年までの間、新規参入者は企業・団体・個人合わせて33者となり、うち22者が現在でも養蚕を継続しています。

また、2023年には、新規参入者の繭生産量は、群馬県全体の37%を占めるに至っています。

2016年度「ぐんま養蚕学校」第1期修了生であり、同年度から養蚕を開始した浅井広大（富岡市）さんは、現在、年間800～900kgの繭を生産されていますが、繭生産量1トンを目指して精力的に取り組まれています。また、養蚕に興味がある方や養蚕参入を志している方への情報提供を行うなど、養蚕に携わる人を増やす活動にも力を注がれています。

今後の課題と取組みの方向性

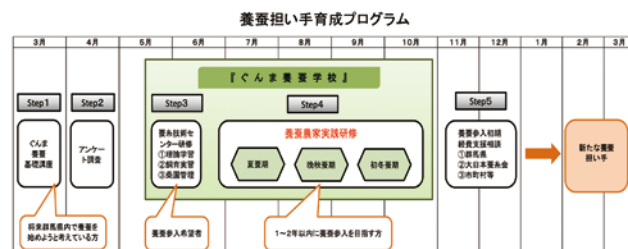
今後、繭生産量を確保するためには、多様な担い手の育成が不可欠です。現在も新規参入者以上に高齢化等によりリタイアする農家が多く、養蚕戸数は減少しています。そこで、継続的に新規参入者を確保・定着させるため、次の取組みを進めたいと考えています。

1 「ぐんま養蚕学校」の研修カリキュラム

「ぐんま養蚕学校」の研修カリキュラムについて、優良繭生産の重要性をより理解してもらえるよう内容のレベルアップを図ります。また、ホームページやマスコミ利用だけでなく、農林水産省、大日本蚕糸会等の協力を得るなど、全国的な広報活動を強化し、研修生の掘り起こし、新規参入者の育成・確保を行います。

2 養蚕の定着を促す

近年、新規参入者は、個人のみならず、企業や団体など様々な経営形態であることから、養蚕に参入を希望する場合には、各々の形態、経営方針を踏まえて、養蚕開始に向けた相談や知識・技術面への後押しを行うとともに、関係者と連携を図りながら様々な機会を通じて養蚕への定着を促します。



活用した助成事業等

- ぐんま養蚕学校
基礎講座受講者：156名（2023年まで）
修了者：21名（2023年まで）
- 養蚕参入者初期経費等補助
事業活用者：27者
補助額：9,766,679円（2023年まで）

問合せ先



群馬県 農政部
蚕糸特産課蚕糸特産係
関 祐輔

〒371-8570 群馬県前橋市大手町 1-1-1
電話：027-226-3092
メールアドレス：seki-yu@pref.gunma.lg.jp



「養蚕業の維持」を 地域振興の柱に据えた 多彩な取組み



とみおか
群馬県 富岡市

取組みの背景

富岡市は、明治5年に開業した「富岡製糸場」を中心に養蚕業を基盤とする絹生産によって、地域経済の繁栄と文化の発展を遂げてきました。

しかしながら、時代の流れとともに養蚕業を取り巻く環境は大きく変化しました。化学繊維の台頭や国際市場での価格競争により、国産絹の需要が減少。さらに、養蚕農家の高齢化や後継者不足といった課題があります。

富岡市では「養蚕業の維持」を地域振興の柱に据え、これまで蓄積された伝統と技術を次世代に継承し、多くの方々に養蚕業の重要性を再認識する機会を提供するためのさまざまな取組みを展開しています。



富岡製糸場（表門）



富岡製糸場（レンガ造りの東置蔵所）

取組みの内容

1 新規養蚕農家の参入促進と支援

新規養蚕を希望する方に対し、市と関係機関が連携をして、安心して養蚕業を始められる環境を整備しています。

(1) 各関係機関との連携

熱心な養蚕参入希望者に対し、県が主催している養蚕学校を紹介しており、受講後に参入を決意した方には、桑園や養蚕道具などの確保を支援しています。また、養蚕を行うための空き住宅情報も提供しています。養蚕を始める時期が決定した際には、新規参入者と関係機関が協力して養蚕計画を策定し、スムーズに養蚕が始められるよう支援を行っています。

(2) 養蚕指導員の配置

蚕の飼育方法から繭の出荷まで、専門的なアドバイスやサポートを行う養蚕指導員を市で委託しています。

(3) ベテラン養蚕農家との連携

希望する方には、市内で活躍しているベテラン養蚕農家にて養蚕研修を受ける機会を提供し、ネットワークの構築を支援しています。また、技術面でのサポートやノウハウの共有を進めています。



新規養蚕参入者（地域おこし協力隊）と指導員

(4) 経済的な支援

新規参入者に対しては、桑畑の整備費用や養蚕設備の購入費用などの初期投資負担を軽減するため、補助金制度を設けて支援しています。

2 参加型プログラムの推進

市民に向けた養蚕体験プログラムや教育活動を展開し、養蚕業の重要性を再認識する機会を提供しています。

(1) 市民養蚕の実施（2015年から2020年まで）

市民が養蚕体験を通して、養蚕業への理解を深めてもらうことを目的に2015年から始めました。（現在は、所期の目的を達成したため、事業を終了しています。）

(2) 繭と生糸のふれあい体験事業（2014年から）

市内小学校の児童（3年生、4年生）は、蚕の飼育や繭作りを体験し、さらに上州座繰り機を使って繭から生糸を取り出す体験も行っています。

(3) 市民桑園の整備（2017年から）

市民養蚕を実施する際に、市民が蚕を桑で飼育できるよう「市民桑園」を整備し、養蚕業の重要性を体感できる場を提供していました。現在は、新規養蚕参入者がすぐに養蚕に取組めるよう、桑園を提供しています。



市役所エントランスでの蚕の展示

3 地域おこし協力隊の採用

養蚕の振興と継承者を育成するため、地域おこし協力隊を採用しています。

現在、2022年7月から養蚕担当が1名、2023年9月からシルクPR担当が1名、計2名が養蚕業と絹産業の振興活動を行っています。

また、SNSを活用した情報発信を積極的に行っています。



地域おこし協力隊によるSNSを活用した情報発信



TOMIOKA SILK プレミアムコレクション
シルクオーガングーストール Akebono (アケボノ)



KEITA MARUYAMA コラボスカーフ ボタニカルチェリー

4 「富岡シルク」のブランド化に向けた活動

養蚕業の振興と伝統文化の継承を目的に、「富岡シルク」のブランド化に取り組んでいます。この活動については、2008年に設立された「富岡シルクブランド協議会」を前身とし、2021年7月1日に一般社団法人「富岡シルク推進機構」(以下(一社)富岡シルク推進機構)が設立され、協議会の全事業を引き継ぎ、富岡産繭を使用したシルク製品の開発や、観光プロモーションを展開しています



富岡製糸場 東置繭所(国宝)内のシルクギャラリーの様子



富岡製糸場 西置繭所 2階展示エリア

取組みの効果

1 新規養蚕農家の参入促進と支援

2022年度に1戸、2024年度に2戸の新規養蚕農家が参入しました。これにより、高齢化による減少に歯止めがかかり、富岡市の養蚕業の持続とともに、伝統文化の継承が期待されています。

2 参加型プログラムの推進

市民養蚕は、事業開始された2015年度から2020年度に終了するまでに延べ1,919件の参加があり、出来上がった繭は、富岡製糸場内で行われている座繰りの実演で活用していました。

また、繭と生糸のふれあい体験を通じて、児童たちは養蚕業と富岡製糸場の歴史的な関係を学び、地域に対する理解を深めています。この事業は、未来を担う世代に養蚕の文化とその重要性を伝える貴重な場となっています。

さらに、市民桑園は市内18カ所、約3ヘクタールを整備し、市民が桑園の風景に触れることで、養蚕業や蚕糸業の魅力を再認識しています。この取組みは、養蚕振興を支える意識を育む重要な役割を果たしています。

3 地域おこし協力隊の採用

FacebookやInstagramなどのSNSを通じて、養蚕業や富岡シルク製品について、若年層や国内外の方々への認知度が高まっています。

また、養蚕担当の隊員は任期後も養蚕農家として定住し、養蚕を続ける予定です。



地域おこし協力隊のInstagram

4 富岡シルクのブランド化

富岡産の繭を100 % 使用した「富岡シルクブランドマーク」や「富岡シルクプラチナマーク」の交付を通じて、生産者の顔が見える純国産絹製品づくりが推進されています。この取組みを通じて、高品質な富岡産繭や絹製品の生産が進み、企業との積極的なコラボレーションが広がり、その優れた品質が高く評価されています。その結果、富岡シルクのブランド化が着実に確立されつつあります。



地域おこし協力隊員が手掛けたバンダナ
(富岡産シルク 52%、コットン 48%)

課題とその解決に向けた今後の展望

養蚕業や富岡シルクの普及には一定の成果が見られますが、後継者不足や繭価格の不安定さ、ブランドの確立といった課題も残されています。特に養蚕業は高度な技術が求められるため、若年層の参入を促進するには技術的および経済的な支援が不可欠です。また、絹の高付加価値化を進めるとともに、富岡産繭を活用したオリジナル商品の開発や新たな用途提案を通じて市場競争力を強化することが求められます。さらに、観光業との連携を深め、体験型プログラムなどを充実させることで、多くの人々に富岡シルク製品や養蚕業の魅力を伝えていくことが重要です。

養蚕業や富岡シルクの普及に向けた取組みをさらに進め、地域活性化とともに、伝統文化の継承も目指しています。今後も養蚕農家、市民、(一社) 富岡シルク推進機構などと行政が一体となり、養蚕業の持続可能な発展を目指していきたいと考えています。

問合せ先

 **富岡市** Tomioka City Site
群馬県 富岡市
経済産業部 農林課蚕糸園芸係
山崎 知恵子

〒370-2392 群馬県富岡市富岡 1460-1

TEL : 0274-62-1511

メールアドレス : sanshiengei@city.tomioka.lg.jp



本庄市を紡いだ養蚕文化を 後世に伝える取組み



ほんじょう
埼玉県 本庄市

取組みの背景・経緯

本市における蚕糸業の歴史文化

江戸時代末期に横浜が開港し、蚕種や生糸が主要産品として輸出されるようになると、桑の生産に適した本市域においても蚕糸業が発展しました。大型の養蚕民家による養蚕業だけでなく、蚕種業も盛んに行われました。また、養蚕業から郷土料理「つみっこ」も生まれ、現在でも市民に親しまれています。

本市域での繭・生糸の取引は江戸時代から開始していましたが、近代以降、養蚕の隆盛に伴い本市域は繭の一大集散地として発展しました。特に、旧本庄宿では、明治27年に本庄商業銀行が設立され、繭・絹取引の資金供給が行われました。一方で、農家の副業として太織の製織も開始し、後に専門家が生まれると、明治時代中期以降には伊勢崎銘仙として全国に名を広めました。

繭の需要が高まると、本市域は産業教育の中心地となり、日本の養蚕業の発展に大きな役割を果たしました。木村九蔵(1845-1898)は、自身が改良した蚕種「白玉新撰」と飼育法「一派温暖育」^(*)の伝習のため、新宿村(現在の神川町)で養蚕改良競進組を結成、明治17年に養蚕改良競進社へ改称し、児玉町(現在の本庄市)に出張事務所と競進社蚕業伝習所を開設、全国から生徒を集め、全国へ養蚕教師を派遣しました。また、秋平村(現在の本庄市)には明治45年に根岸坦父によって高山社の分教場が置かれ、蚕業教育が行われました。この分教場は、現在、本市の小平地域の蚕業遺産を展示する「農村ミュージアムかねもとぐら」として子孫の方によって保存されています。

*1：火力を用いて温湿度管理に重点を置き、蚕病の防除と飼育日数短縮を実現する飼育方法

取組みの内容

蚕糸業によって発展した本市ですが、残念ながら産業としての蚕糸業は現在行われておりません。一方で、蚕糸業の隆盛を今に伝える歴史文化は、数多く残されており、これらを後世に伝えていくため、本市では様々な事業に取り組んでいます。

1 文化財の保存活用

本市では、埼玉県指定有形文化財「競進社模範蚕室」及び国登録有形文化財「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」を整備し、公開しています。「競進社模範蚕室」は、明治27年に競進社蚕業伝習所内に設けられた実習場です。内部では、一派温暖育に適した構造と木村九蔵及び競進社、蚕糸業に関連する資料を展示しています。また、令和4年度からは児玉商工まつりに合わせて放水銃体験を開催し、市民に対して文化財愛護の意識高揚を図っています。

「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」は、明治29年に建築された本庄商業銀行の繭倉庫です。本建物の歴史を紹介するだけでなく、展示スペースを設け、江戸時代の本庄宿や明治時代以降の蚕糸業による発展の様子



競進社模範蚕室



旧本庄商業銀行蔵倉庫（煉瓦造り）

を関連する文書や資料を交えながら紹介しています。令和5年度からは企画展示を実施しており、令和6年度は、令和7年1月より木村九蔵と競進社による産業教育に関する企画展示と関連事業の開催を予定しています。

2 上武絹の道

本市を含む埼玉県北部、また群馬県南部には多くの蚕糸業に関する歴史文化（絹産業遺産）が残されています。そこで、絹産業遺産に関連する地域資源が集積した地域を「上武絹の道」と位置付け、地域振興の推進に向けて、群馬県伊勢崎市、藤岡市、富岡市、下仁田町、埼玉県本庄市、深谷市、熊谷市の7市町が協働で取り組んでいます。観光情報の発信のほか、令和4年度からは、「上武絹の道宝探し」を実施し、謎解きをしなが各所を巡ることで、回遊性や認知度の向上を目指しています。



リアル宝探し「上武絹の道宝探し」

3 本庄絣とふるさと納税

前述した本市の伊勢崎銘仙は、現在、「本庄絣」として埼玉県伝統的手工芸品に指定されています。本庄絣をつかった名刺入れやネクタイなども作られ、新たな産業の創出につなげています。また、ふるさと納税

の返礼品にすることで、本庄絣の魅力や歴史文化の発信に努めています。



本庄絣を活用したネクタイ

4 市民総合大学

本市では、本庄市の未来を担う人材の育成と市民一人ひとりの自己実現を推進するため、平成22年より市民総合大学を開校し、専門性の高い講座を開講しています。この中で、平成26年度～平成28年度及び令和5年度に蚕糸業に関する講座を開講しました。令和6年度においても本市における蚕糸業の歴史に関する講座（講座名：本庄市の絹産業遺産～蚕糸業の歴史と現代に残る文化財～）を令和7年2月に開講する予定です。

取組みの効果と今後の課題

これまでの取組みによって、

- ① 本庄市に残る蚕糸業に関する文化財及び歴史文化の認知度の向上
- ② 本庄絣を活用した新たな産業の創出
- ③ 取組みを通じた周辺市町との連携の促進について一定の成果が得られました。

一方で、展示施設への来館者やイベントへの参加者の新規開拓、本庄絣の生産者の高齢化及び担い手不足など、それぞれの事業で抱える課題もあります。これらの課題を踏まえながら、蚕糸業の歴史文化を後世に伝えていくため取組んでまいります。

問合せ先



埼玉県本庄市
教育委員会 文化財保護課
松浦 誠

〒367-0035 埼玉県本庄市西富田 1011 S202
電話：0495-71-6878
メールアドレス：bunkazai@city.honjo.lg.jp



「桑都・八王子」の魅力の世界へ



はちおうじ
東京都 八王子市

取組みの背景

八王子は、養蚕や織物が盛んだったことから「桑都」と称されました。（「桑都」と呼ばれるようになった由縁は、西行が詠んだという短歌「浅川を渡れば富士の雪白く桑の都に青嵐吹く」が、江戸時代後期の随筆に記録されていたことにあります。）

甲州道中最大の宿場町となり、様々な文化を育みながら発展してきたまちの礎は、戦国時代末期の武将・北条氏照が城下町を築いたことに遡ります。

軍事面だけでなく城下町の整備にも力を入れた氏照は、滝山城から八王子城に居城を移す際、織物の取引が行われていた市も引継ぎ、これが「八王子織物」の起源となりました。

江戸時代になり、幕府が江戸西方の防衛や交通の要衝として整備した八王子宿（現在の八王子市中心市街地）に城下町や市を移して以降、八王子は絹産業を基盤に甲州道中最大の宿場町へと発展。群馬や埼玉などから大量の生糸が集まり、幕末から明治期にかけては「絹の道」を通して横浜へ出荷・輸出されました。

絹産業の発展は、伝統工芸品「多摩織」を生み出すとともに、地域に豊かな文化を育みました。

江戸時代、粋な町人は絢爛豪華な山車づくりを競い合い、まちを火事から守った鳶職は江戸の木遣唄を継



桑畑（イメージ）



多摩織

承しました。また、明治期以降、花街では八王子芸妓が絹商人をもてなし、農村の娯楽からまちの芸能へと発展した八王子車人形がもてはやされました。

絹産業は高尾山薬王院への信仰とも深く結びついて

いました。

養蚕農家は、大切な蚕を鼠から守るために「蚕守」の護符を薬王院に求め、絹商人は、養蚕農家や機屋、江戸の問屋に薬王院の護摩札の配札を取次ぐことで信仰圏拡大の一翼を担いました。

現在、多くの観光客が来訪する高尾山から関東平野を見渡すと、そこには北条氏の領地と、八王子を中心とした絹産業の経済圏、そして高尾山薬王院の信仰圏が重なり合っています。

取組みの内容（経緯）

2017年に八王子市は市制100周年を迎えました。この時、次の100年に向けたまちづくりに本市の歴史・文化を活かす取組みの一環として、日本遺産の認定をめざすことになりました。

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。認定申請にあたり、八王子の歴史・伝統文化に欠かすことのできない「多摩織」、「絹の道」、「養蚕守護札」などを構成文化



2023年「日本遺産フェスティバル in 桑都・八王子」キービジュアル

財とし、認定後は、様々なイベントなどを通じて、八王子の日本遺産ストーリーや多摩織をはじめとした構成文化財の魅力を多くの人に知ってもらう取組みを進めてきました。

2018年4月 八王子市役所内に担当部署を立ち上げ
2020年1月 「八王子市歴史文化基本構想」策定

日本遺産認定申請

2020年6月 日本遺産認定（日本遺産ストーリー No88
「霊気満山 高尾山～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」）

2020年7月 市内の事業者や団体などで構成する
日本遺産「桑都物語」推進協議会を設立

2023年11月 「日本遺産フェスティバル in 桑都・八王子」開催



2023年「日本遺産フェスティバル in 桑都・八王子」会場の様子

取組みの効果

2023年11月に、全国の日本遺産認定地域が一堂に会する日本遺産フェスティバルを八王子で開催したことにより、本市が日本遺産のまちであること、かつては織物で栄えたまちであることの認知度が向上したものと考えています。

また、全国には、八王子以外にも織物・染物をテーマに持つ日本遺産認定地域があります。2023年度から始めた事業では、徳島県、群馬県、山形県、八王子市による地域連携の取組みとして、「群馬県の生糸」を「徳島県の藍」と「山形県の紅」で染め、「八王子市で織りあげ」たネクタイやストールを製作。前述の



市内の織物工場

日本遺産フェスティバルで製品や取組みを紹介しました。更に、京都府において展示会を行い、大変多くの方に織物・染物の技術や魅力を知っていただくことができました。地域連携の取組みは令和6年度以降も継続して進めていきます。



日本遺産フェスティバルで紹介した地域連携の取組みと製品

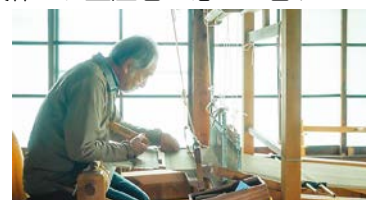
学校教育においては、「桑都・八王子のふるさと料理」が2024年3月に文化庁の100年フード事業に認定されました。学校給食を通じて桑の葉を使ったメニューを提供するなど、地域の子もたちや家庭に八王子の歴史文化や郷土の魅力を伝える取組みが進んでいます。

今後の課題とその解決に向けた方向性

時代の変遷とともに人々の生活様式が変わり、製品としての織物の需要も和装製品から洋装製品へと変わりました。外国製品も大量に流通する中、織物産業に関わるそれぞれの地域に求められているのは、新たな価値、その地域でしか手に入らない、体験できないという価値付けです。

八王子が織物のまちであることを知っていただいた次に取り組むべきは、織物産業の方々が受け継いできた技術や想いを、多くの人に手に取って感じてもらうことです。

そのため当協議会では、地元デザイナーとも連携して八王子の織・染の技術を活かした八王子オリジナルの高付加価値商品を製作し、生産者の想いと合わせてその魅力を発信することで、織物に関わる産業の持続的な発展をめざしていきます。



織物に関わる産業の持続的な発展をめざして

活用した助成事業等

- (1) 2020年度～2022年度・文化芸術振興費補助金
 - ・文化資源活用事業費補助金
- (2) 2024年度
 - ・日本遺産魅力増進事業
 - ・日本遺産魅力発信事業

問合せ先



八王子市
HACHIOJI CITY

日本遺産「桑都物語」推進協議会
（事務局：八王子市日本遺産推進課）
平井 健太郎

〒192-8501 東京都八王子市元本郷町 3-24-1
電話：042-620-7434
メールアドレス：japan-heritage-soto@city.hachioji.tokyo.jp



地域の無形文化を次世代へ継承



みなみうおぬま
新潟県 南魚沼市

取組みの背景・経緯

塩沢紬について

南魚沼市の塩沢・六日町地域は十日町・小千谷産地と並んで越後新潟を代表する織物産地です。

塩沢産地の絹織物は2009年9月にユネスコ無形文化遺産に登録された「越後上布^{えちごじょうふ}（*1）」の技術を活かしている塩沢紬・本塩沢・夏塩沢が主流製品です。

塩沢織物の中で歴史の長い本塩沢は17世紀中期に誕生し、サラリとした肌ざわりと、いろいろな緋により構成された柄模様が上品さと優雅さを生み出して従来は「塩沢お召し」の名で広く親しまれていました。この本塩沢と塩沢紬は国の伝統工芸品に指定されています。

しかし、近年は長期構造的な不況の中、生産・出荷高の減少及び組合員の減少など、産地基盤の弱体化が進んでいます。

この伝統ある技術・技法を後世に継承するために物作りの原点に戻り、より一層消費者に愛される製品作りに日々努力しています。



塩沢の四大織物
(麻織物の越後上布と絹織物の塩沢紬・本塩沢・夏塩沢)

(注) *1：越後上布とは、原料に「苧麻^{ちよま}」を用いた、通気性に富み、シャリ感と言われるサラリとした着心地の夏物としては最上級の麻織物です。その製作技術は伝統的な麻織物の製法を現代に伝えるものであり、希少性の高いことなどから、昭和30年（1955年）に国の重要無形文化財に指定され、平成21年にはユネスコ無形文化遺産リストにも記載されました。このユネスコ無形文化遺産リストへの記載は、染織技術部門としては日本で第1号の登録です。

取組みの内容

南魚沼市にある小学校では、今年1年生の児童たちが生活科の授業で、蚕の飼育を行っています。授業で、生き物と触れ合う機会が必要になりましたが、学校で生き物を飼育しておらず何か良い生き物はいないか考えたところ、塩沢地域の伝統工芸品である「塩沢紬」を作る際に必要な生糸を作っている蚕を飼育することにしました。

蚕の飼育は、想像以上に難しく、成長したのはわずか数匹でしたが、この取組みを通じて、子どもたちは、命の大切さ、生き物に対する責任感や愛情を学ぶことができました。

また、3年生になると、織物について調べる取組みも行われるため、3年生にあがった際に1年生の時に飼育した蚕がどのように織物へとつながるのか実感してもらえることを期待しています。



蚕の飼育展示
上から 幼虫期→蛹化期（繭の状態）→羽化期（繭から蛾が出てくる）

取組みの効果と今後の方向性

この「蚕の飼育」について、学校では非常に有意義な取組みであると評価しています。子どもたちが実際に蚕の成長を観察し、飼育をすることで生命の大切さを学ぶと同時に、地域の地場産業への理解を深めることができるため、今後も継続してこの取組みを行っていきたいと考えています。

同様に市としても、このような伝統的な製品に若い子どもたちが関わることは非常に喜ばしく、今後もこの取組みを継続していくことが重要だと考えています。

これからもこの活動を通じて、地域の伝統文化を次世代に継承していくことが大切だと考えます。



郷土の伝統製品を体験する児童・生徒たち

「塩沢つむぎ記念館」の紹介



塩沢つむぎ記念館 外観

伝統技術と、その文化の魅力を一堂に公開しています。伝統工芸の新たな可能性をカタチにした「織の文化の新拠点」は創造と感動に満ち溢れています。

1階では、格調高い「塩沢の織物」の着物とその布を使って製作された各種の生地工芸品を販売しています。また、ここでは塩沢織の布・絹糸・繭を使った織物アート体験もできます。



1階展示場



2階織工房

2階では、「塩沢の織物」が出来るまでの工程をご覧いただけます。さらにその伝統的技法の機織り体験もすることが可能です。「塩沢織」をより身近なモノ・コトとして見て、聞いて、触れて、体験できる空間となっています。

1階 / 入場無料

2階 / 見学料 大人200円・小児100円



第16回手織り体験コンテスト夏の陣 作品 夏



「塩沢つむぎ記念館」での体験活動

問合せ先



新潟県南魚沼市
産業振興部 商工観光課

〒949-6696 新潟県南魚沼市六日町 180-1
電話：025-773-6665

メールアドレス：syokou-s@city.minamiuonuma.lg.jp



郡内織物を活用した二つの取組み

地域産業の魅力や歴史を感じさせる新庁舎建設と
児童・生徒の思いと地域の文化が詰まった卒業証書カバー



にしかつら
山梨県 西桂町

はじめに

西桂町は山梨県東南部に位置し、人口約4,000人で総面積約15平方キロメートル、その面積の80%近くを山林が占める山間の町です。古くから基幹産業として郡内織物と呼ばれる織物の製造業が盛んであり、近年においては健康指向に乗りミネラル・ウォーターの供給が急成長しています。西桂町は1894年に郡内地域で最初と言われる甲斐絹改良組合が設立されたことから、当時の山梨県繊維産業の中心地でした。

現在では、当時からの技術を受けつぎ、それをもとに西桂町ではネクタイ・マフラー・ストール・洋傘・座布団生地・服裏地・婦人服地等多種にわたる織物を生産し、その技術の高さに日本全国のみならず海外からも注目を浴びています。



西桂町（航空写真）



町の基幹産業である郡内織物

新庁舎建設

1 経緯

西桂町の旧庁舎は、1970年以降、西桂町政の拠点として重要な役割を果たしてきましたが、老朽化や耐震性に課題があり、さらに狭あい化・分散化・バリアフリー対応等において町民サービスや行政効率の低下を招いていました。

近年の日本各地の災害被害の経験から、防災・災害対策の中枢を担う庁舎機能の重要性が認識されており、発災時に庁舎が使えなくなると災害対応に大きな支障をきたし、住民生活に与える影響が大きいことから、全国的な防災・減災対策の強化を求める声が高まっています。このような状況を受け、国においても平成29（2017）年度予算において、令和2（2020）年度までの4年間で事業年度とする「市町村役場機能緊急保全事業」を創設し、令和元（2019）年度においては新たな経過措置として、令和2（2020）年度までに実施設計に着手した事業については令和3（2021）年度以降も同様の地方財政措置が講じられることとなりました。このことは、旧庁舎の耐震化が未実施の西桂町において、庁舎の建替えを実施する大きなきっかけとなりました。



町の旧庁舎（全景と庁舎内の様子）

2 内容

隈研吾建築都市設計事務所・桂建築研究所・西桂町役場庁舎基本設計・実施設計業務共同企業体が庁舎の設計を行いました。周囲の山々の風景と調和し人々をやさしく迎え入れることのできる親しみのある庁舎デザインに加え、町民開放エリアとして交流スペースや憩いの場となるひろばを計画し、地域に開かれた、町民にとって利用しやすい庁舎としました。更に、災害に強い安全な庁舎として十分な耐震性を備えた建築・非常用発電設備の設置、ワンストップ機能の実現のため町民利用頻度の高い窓口機能を1階に集約しました。

また、「地場素材や地域産業の特産品を用いた、西桂町の顔となる庁舎」というコンセプトを基に、庁舎建設にあたって以下のような要素を取り込みました。

(1) 西桂町産の木材を内外装に使用し、木のぬくもりが感じられる建築としました。

(2) 外構には富士山の伏流水による西桂町の豊かな水資源を活用した給水所を設け、緑あふれるランドスケープとすることで、町民の憩いの場となる庁舎をつくりました。

(3) 内装や家具には西桂町の産業である織物を用い、地域産業の魅力や歴史を感じる空間としました。

郡内織物使用箇所

1F: にぎわいひろば、情報ひろば、木漏れ日ひろば、その他打合せ室など

2F: 町長室、大会議室、交流ラウンジ多目的スペースなど

織物の使用実面積合計は 763 m²

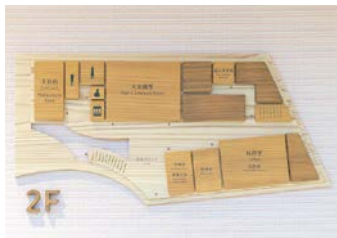
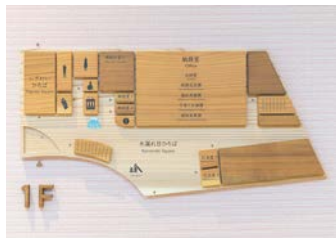


西桂町産の木材を使用した外観



富士山の伏流水を利用した給水所

西桂町産の木材を使用した内装



新庁舎の案内図



情報ひろば



木漏れ日ひろば



にぎわいひろば



交流ラウンジ



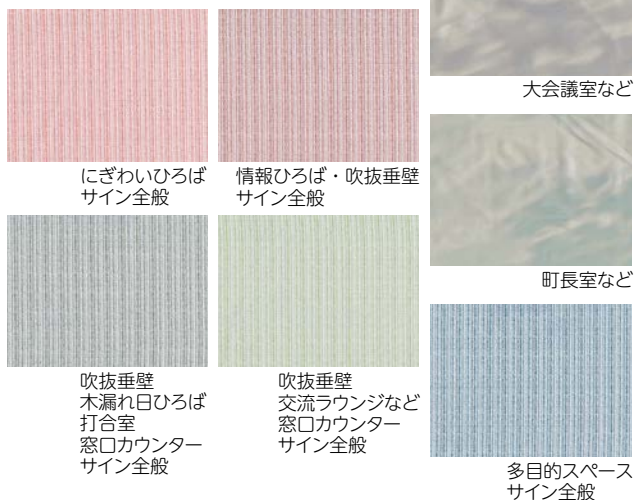
大会議室





施設内の案内に用いられた郡内織物

室内装飾として施された郡内織物



3 効果及び今後

郡内織物を使用したことにより、町の伝統産業の活用事例として大きな宣伝効果が得られています。また、町民に限らず町外から来庁される皆様からも高い評価をいただいております。

町では、建設時に出た端材を使用してオリジナルの小物（エコバッグ、ポーチ、がま口）を作製しました。これらはアメニティーグッズとしてイベント等で配布をしています。

お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください。



イベント等で配布している郡内織物利用の様々なアイテム

卒業証書カバー制作

1 経緯

西桂町を含む郡内地域は、古くから織物の産地です。西桂織物工業協同組合（※）では、長く続く地域の織物業を維持発展させるべく、常日頃から事業に取り組んでいます。そういった中で、若手事業者から「地域にもっと寄り添った活動も必要ではないか」「織物という伝統産業を通じて地域貢献に取組みたい」という意見が上がりました。そこから、私たちが誇る伝統産業の技術を活かして、地域の子供たちの卒業という節目に花を添えようという案がうまれたのです。町の教育委員会にも打診し、初めての試みとして、郡内織物で卒業証書カバーを作るプロジェクトが立ち上がりました。



織物工場を見学する生徒

※組合の概要

組合名：西桂織物工業協同組合

所在地：山梨県南都留郡西桂町小沼 1593-1

理事長：武藤英之（ムトウ・ヒデユキ）

URL：<https://nishikatsuraorimono.com/>

主な生産品目：ネクタイ地、洋傘地、マフラー・ストール、座布団地、服地、服裏地など

2 内容

(1) 児童・生徒の思いが詰まったデザイン

今回の作製にあたり、一番大事にしたのは、デザインでした。ありふれたものではなく、児童・生徒たちが実際に感じている、学校や西桂町に対する思いやイメージを表現することが重要だと考えたからです。そこで、西桂町在住のテキスタイルデザイナー・吉本悠美さん(※)に協力を依頼しました。吉本さんと一緒に、小学校と中学校を訪れ、児童会・生徒会の子供たちから、町や学校への思いをヒアリング。子供たちの声を基に、このデザインが生まれました。

※吉本悠美さん

東京造形大学と山梨県の織物産地との産学連携プロジェクト「フジヤマテキスタイルプロジェクト」がきっかけとなり、西桂町に移住をしたテキスタイルデザイナー。

(2) 使用する生地は高級傘生地

卒業証書カバーの生地製織は、組合に加盟する株式会社 榎田商店が担います。高級傘生地を生産する同社は、先染した細い糸を使用する先染ジャカード技術を活かして、色彩豊かな生地を織り上げました。生地は、見る角度で光沢や色味が変化し、柄が立体的に見えるのが特徴です。卒業証書や校章の部分は金糸を織りこみ、高級感と特別感をより演出します。傘生地と同様の撥水加工を施しているため、生地に汚れが付着しにくいという長所もあります。

製本は京都の加工場に依頼をし、1点1点丁寧に仕上げをしてもらいました。



高級傘生地で作



町のイメージを織り込む

3 効果及び今後

馴染み深い町の風景が描かれたカバーは児童・生徒達や保護者から非常に好評です。

卒業生達の思い出の一品として今後も証書カバー作製を続けていきます。



完成品

問合せ先



山梨県 西桂町
Nishikatsura Town
山梨県西桂町
西桂町役場 建設産業課
植村 まいこ

〒403-0022 山梨県南都留郡西桂町小沼 1500-1
電話：0555-25-2173
メールアドレス：maiko@town.nishikatsura.lg.jp

■庁舎建設

西桂町建設産業課 商工観光係
〒403-0022 山梨県南都留郡西桂町小沼 1500-1
電話：0555-25-2173

■卒業証書カバー

西桂織物工業協同組合
事務局 中沢
〒403-0022 山梨県南都留郡西桂町小沼 1593-1
電話：0555-25-2406



岡谷シルクを核にした地域活性化



おかや
長野県 岡谷市

取組みの背景

かつて国内では「糸都岡谷」、海外からは「シルク岡谷」として知られ、最盛期には日本の輸出生糸の生産量の11%を岡谷産の生糸が占め国内外にその名を轟かせた岡谷市。当時市内には大小200もの製糸工場があり、全国各地から集まった工女達が市内の製糸工場で働き、活発なシルク産業を支え、まちは沢山の人が賑わっていました。

現在では日本のシルク産業は衰退し、岡谷市においても製糸工場は1軒が操業するのみとなり、製糸全盛期の頃のようなまちの賑わいは見られなくなっています。

このような中、地域資源である「岡谷シルク」を再び地域活性化の核とするため、現在様々な取組みを展開しています。

岡谷市の養蚕業は一度途絶えています。平成28年に、日本最大の製糸工場を創業した片倉兼太郎ゆかりの地である三沢区の住民有志が運営する「三沢区民農園」で養蚕を復活させました。製糸では、現在、常時本格的な稼働をしている国内の製糸工場は4軒のみとなっていますが、その内一つが岡谷蚕糸博物館に併設されている「宮坂製糸所」です。工場では自動機による繰糸のほか、諏訪式繰糸機や上州式繰糸機により、昔と同じく手作業で糸繰りして生糸を生産しています。そして製品化では、かつて製糸工場の事務所で国の登録有形文化財に指定されている建物で活動している「きぬのふるさと岡谷絹工房」において、「染め」、「整経^{せいけい}」^(*)、「織り」といった工程で絹製品を作り出しています。この、養蚕、製糸、製品化といった、3つの要素が現存しているまちは国内でも稀で、日本最大のシルク生産地であった岡谷市だからこそ恵まれた環境を活かした取組みであります。

取組みの内容

1 岡谷シルクブランドの再構築

(1) 岡谷シルクブランド製品の認証

岡谷シルクブランドの再構築による地域活性化を推進するため、岡谷産シルク製品やサービスなどを岡谷シルクブランド製品として認証するもので、岡谷産の繭や生糸の使用割合などにより4つの類型に分類し、現在86件の製品、サービスを認証しています。この認証の核となるのが養蚕から製糸、製品化までの過程を市内で完結するオール岡谷産シルクの製品開発です。



プラチナシルク・ロゴマーク



オール岡谷産シルクの風呂敷

オール岡谷産シルク製品の代表的なものとして風呂敷があげられます。三沢区民農園で育てた繭から、宮坂製糸所で糸を取り、岡谷絹工房で染色機織りをした独特の風合いのある手織りの風呂敷です。まさにオンリーワンの風呂敷です。

たていと
*1：経糸を一定の張力で、所要の長さ・幅・本数を揃える作業

(2) 岡谷シルク体験

シルクのまち岡谷だからこそ味わえる様々な体験の機会も提供しています。

春、秋の年2回実施している養蚕体験では、蚕の生態やシルクの性質、岡谷の蚕糸業の歴史などの学習とコースターを制作する機織り、三沢区民農園で桑の葉の刈り取りや給桑、収繭作業などを1日で体験します。

滞在型ワークショップでは、市外の方を中心に岡谷市に滞在し、岡谷絹工房において実際に自分で機織りをして半幅帯やストールなど時間をかけて自分だけのシルク製品を制作します。そして、シルク岡谷次世代担い手育成プログラムでは、三沢区民農園で蚕室の準備や蚕の飼育、繭の収穫をして、宮坂製糸所で糸を取り、岡谷絹工房で染めと織りをしてストールや帯などを制作するもので、養蚕から製糸、製品化まで1年を通して学び体験します。



養蚕体験の一コマ

(3) カイコ学習

教育面でも岡谷ならではの学びとして岡谷シルクは活かされています。市内保育園では、お蚕さまを育てる体験を行い、幼少期からお蚕さまに慣れ親しみ、市内小中学校では、桑を育て、カイコを飼い、繭から糸を取り、糸からモノをつくるところまで一貫して体験しています。また、岡谷市のシルクの歴史や文化、蚕の生態などを学べる動画を制作し各学校で活用いただいています。蚕糸博物館の見学と合わせて学習することで、さらに理解が深まるプログラムとなっています。岡谷蚕糸博物館のホームページで公開していますので是非ご覧ください。



小学校でのカイコ学習



滞在型ワーク・ショップで機織り体験

2 各種イベントによる岡谷シルクブランドの発信 (2024)

(1) シルクフェア2024 (4月)

「シルク岡谷」の歴史を風化させることなく広く継承することを目的に、毎年4月29日を「シルクの日」として開催しています。28回目の開催となる2024年は、シルクに関連する市内各所を会場にして、機織りや糸取り、工作、実験、シルク製品の販売、音楽イベント、製糸から派生した岡谷味噌にまつわる講演会、製糸関連施設を巡るまち歩きやバスツアー、マルシェなど、まち全体でシルク岡谷を堪能できる盛りだくさんの内容で開催しました。天候にも恵まれ、県内外から約3,000人の来場があり、まちなかは多くの人で賑わいました。

(2) 日本絹文化フォーラム (6月)

例年全国的な規模で絹文化に関する講演や情報交換の場としている当フォーラムでは、「日本の色を引き出す糸の力」をテーマに講演、パネルディスカッション等を行いました。基調講演では、今フォーラムのコーディネーターであり、きものジャーナリストとしてご活躍の中谷比佐子先生が「日本人の色と糸」と題し、えんぞう塩蔵の繭^{(*)2}の生糸から染織した珍しい織物などを取り上げながら、日本の色と絹糸の魅力について話されました。

続いて、江戸古法染作家の高橋孝之先生(東京)、京鹿の子絞りの寺田豊先生(京都)、そして爪搔本綴織^{(*)3}の服部秀司先生(京都)と、いずれも日本屈指の伝統の染織技術と絹文化を継承される専門家の先生方より活動事例を話していただきました。

「日本人の色と糸」と「伝統の技術」の凄さについて痛感しながら、先生方からは、シルクの歴史文化を伝え今なお養蚕から製品化までに取組む岡谷市の可能性について多くのご賛同をいただく機会となりました。

*2: 塩漬けにして長期保存した繭で、生繰りに適す

*3: 織物を織る際に、ノコギリ状に研いだ爪先つまさきで緯糸をかき寄せ、経糸が見えないように打ち込み、立体的に絵柄を表現する技法

(3) 岡谷蚕糸博物館開館60周年

リニューアルオープン10周年記念式典 (9月)

式典では、製糸機械等を当市に御寄贈いただき昭和39年の岡谷蚕糸博物館開館に御貢献いただいた片倉工業株式会社の佐野公哉相談役、平成26年の当館リニューアル時に多大な御支援をいただいた大日本蚕

糸会の松島浩道会頭、経済学者として長きにわたり岡谷の製糸業を研究され発信していただいた東京大学名誉教授の石井寛治先生から、それぞれお祝いのお言葉をいただきました。岡谷蚕糸博物館館長の高林からは「蚕糸博物館60年のあゆみ」と題し当館の歴史や未来に向けた博物館の役割などを語りました。

記念講演会では、あの「あゝ野麦峠」の岐阜県飛騨市の都竹淳也市長よりご講演をいただきました。「飛騨と岡谷ー糸引き工女を通じた豊かな産業交流の歴史」と題されたお話は、映画「あゝ野麦峠」による哀史のイメージに「事実と違うのでは?」と異議を持たれた飛騨市長ご自身が、飛騨の糸引き工女の歴史を調べ直し、正しい歴史観で「女工哀史」を上書きしたいという想いからのものでした。調査研究の報告や当時の飛騨の製糸業の様子、工女さんたちの実態などが細かく紹介されました。最後に都竹飛騨市長より「『女工哀史』から『女工讃史』へ」とのメッセージをいただきました。

(4) 諏訪圏工業メッセ (10月)

諏訪地域における「魅力ある SUWA ブランドの創造」を目指し、諏訪圏における切削・プレス・電子・金型など特徴ある超精密・微細加工技術を有する工業の集積地ならではの技術や取組み等の展示が行われました。ブランド推進室ではオール岡谷産シルク製品をはじめとした岡谷シルクブランド認証製品の数々を紹介し、「岡谷シルク」の魅力をPRしました。来場



諏訪圏工業メッセでのシルクブランドの展示

された方は、岡谷シルクの製品や製糸業の歴史等の説明に興味深そうに聞いていただき、一方では、シルク素材が繊維に留まらず石鹸や化粧水など意外なところへ活用されていることに驚きながら関心を示していただきました。今回の展示では、歴史の重みを感じていただきながら、未来に向けた岡谷シルク製品の可能性について、たくさん紹介することが出来ました。

(5) シルクサミット2024in 糸都岡谷 (11月)

蚕糸文化への理解を深めるシルクサミットを農研機構、大日本蚕糸会、岡谷市の主催により2日間の日程で開催しました。講演会に先駆けて開会のあいさつでは、早出一真岡谷市長が岡谷市内の呉服屋、「きもの屋そねはら」から寄贈されたばかりの「岡谷シルクの羽織」と袴姿で登場し、岡谷シルクをアピールしました。

基調講演では岡谷蚕糸博物館館長の高林より「なぜ岡谷は世界一の生糸生産地になったか」と題し話しました。「諏訪式繰糸機」など革新的な技術の開発、優れた経営者の存在、工女の活躍などを挙げ、「製糸業発展のインパクトが日本の近代化に及ぼした影響は計り知れない。未来への大きな指針になる。」と説かれました。國學院大学大学院の小藤菜緒さんからは、製糸業から派生した岡谷の味噌醸造業について講演をいただきました。

そして学習発表では、岡谷市立上の原小学校の児童約20人により、クイズや寸劇を通して蚕の飼育や生



シルクサミットで岡谷市立上の原小学校児童による学習発表

態、いただく命の尊さ、繭を使ったものづくりなどの学びを披露されました。このほか、養蚕やシルク産業に関わる皆様から活動事例報告をいただき、新たなカイコ・シルク文化の創造に向け情報交換を行いました。2日目は岡谷市内の製糸関連近代化産業遺産巡りと岡谷蚕糸博物館の見学を開催し、岡谷のシルクの歴史を堪能いただきました。

おわりに (これまでの評価を踏まえて)

岡谷市は、養蚕、製糸、製品化という一貫したシルク生産体制を地域内で完結できる、国内でも稀な環境を活かし、地域資源である岡谷シルクブランドの再構築を通じて、未来へとつなげる様々な取組みを進めています。

岡谷シルクブランド製品の認証や開発、体験型プログラム、教育現場でのカイコ学習など、その活動はシルク文化の次世代への継承だけでなく、観光や地域間交流の促進、さらには郷土愛の醸成にも大きく寄与しています。

特に、子どもたちがカイコを育て、糸を取り、製品を作る過程を学ぶことで、地域の歴史や文化、産業を理解する機会となっています。また、この学びを学校や地域で発表することで、カイコ学習の輪を広げるとともに、「岡谷シルク」の魅力を伝える役割も果たしています。

さらに、シルクに関連する体験プログラムやイベントは、多くの方々に岡谷市を訪れるきっかけを提供しており、製糸業に携わるために移住した方や養蚕活動への参加、体験プログラムのリピーターなど、新たな関係人口の創出にもつながっています。

このように岡谷市では「岡谷シルク」を核とした地域活性化を進め、これまで培われたシルク文化を未来に向けてさらに発展させ、新たなシルク文化の創造と可能性を追求しています。

問合せ先

湖に映える、美しいものづくりのまち 長野県 岡谷市
○岡谷市 OKAYA 産業振興部 ブランド推進室
小平 寛

〒394-0021 長野県岡谷市郷田 1-4-8

電話：0266-23-3489

メールアドレス：kodaira.hiroshi@city.okaya.lg.jp



シルクミュージアム発信による 新たなカイコ活用プロジェクト

養蚕・繭の価値を多角的にとらえた活動



こまがね
長野県 駒ヶ根市

取組みの背景・経緯

駒ヶ根シルクミュージアム（以下シルクミュージアムと記載）は、カイコ・シルクに関する展示、および地域の養蚕、蚕糸絹業を中心とした歴史や文化に関する展示を行っています。2002年に開館し、繭を素材としたクラフト作り、織物・染色の体験、特別展の開催なども合わせて行い、県内はもとより中京圏を中心に多くの方々に来館頂いています。

しかし、コロナ禍を機に来館者が減少しています。この対策、並びに養蚕、蚕糸利用による地域の活性化事業の一環として本プロジェクトが2023年度に計画

され、2024年度から事業が始まっています。始まったばかりの企画であり、課題山積ではありますが現状を報告させていただきます。

2023年7月、シルクミュージアムのあり方について検討を開始。シルクミュージアムは市の組織では農林課に所属しているため市長はじめ関係者との間でミュージアムの方向性を協議。

2023年12月にはシルクミュージアムの新プロジェクト計画を市議会に報告。計画概要が了承され、具体策作りを開始しました。



駒ヶ根シルクミュージアム

取組みの内容

1 教育・興味に応える学習の場の提供

(1) 動態展示

昔の資料のみでなく、外から見てもわかりやすい、今に繋がる展示を行う。世界の蚕、蚕の生態、実際の蚕の飼育の様子等の展示と併せ、館長による専門知識を活かした講座等を開催し、学習グループの受入も模索する。

(2) 子どもクラフト展示

シルククラフトの柱の一つとして、新たに「(仮) 子どもクラフト展」を開催し、クラフト体験の規模拡大を図る。

2 地域活性化の「知恵袋」^{おおくさ}としての機能の活用

(1) 伊那谷原産蚕品種「大草」^{おおくさ}復活プロジェクト

伊那谷でかつて広く飼育されていた蚕品種「大草」の蚕飼育を行い、歴史的文化の継承も含め、地元の絹織物である伊那紬の生産に繋げていけるようなプロジェクトを検討する。

3 新たな繭^{さなぎ}の活用の展開

(1) 蛹^{さなぎ}

繭の中の蛹のみを求めるリクエストもバイオ企業から寄せられていることから、増産に向けた飼育環境の整備を進める。

(2) 繭層^{けんそう}

蛹を除いた繭（繭層）は本ミュージアムで行なっている繭クラフト体験に活用する。繭層のクラフト以外の活用の検討を行い、養蚕の活用範囲の拡大を目指す。



旧教員住宅での養蚕（8畳間）

取組みの状況・効果

1 旧教員住宅、シルクミュージアム保有の養蚕道具を用いた養蚕スタート

事業初年度となった 2024 年度は、春蚕・夏蚕・秋蚕で3万頭の飼育を計画しました。桑はシルクミュージアム、借地桑園を合わせた10a を利用しました。

稚蚕から桑葉給桑とし、稚蚕期の飼育はミュージアム保有のインキュベーターを使用し、4齢からは近くの小学校の旧教員住宅で行いました。飼育道具は、地域からシルクミュージアムへ寄贈され、収蔵庫に保管されていたものを活用しました。

春先には思いも寄らなかった鹿による桑の食害、夏はその影響が残り、飼育頭数は1万8千頭となりました。目標は下回りましたが、蚕病は皆無で化蛹率も100% 近くと好成績でした。

飼育を旧教員住宅とした背景には2つのねらいがありました。その1つは、使用されなくなった市の財産の有効活用です。2つ目は今後飼育を市内に拡大して行く予定ですが、一般家庭でも行えることをアピールすることにありました。

駒ヶ根市内は長野県内でも養蚕が盛んであった地域で、蚕棚^{かいにだな}（*1）や蚕箔^{さんぱく}（*2）などが地域住民の所有する蔵や倉庫に保管されている家が残っている土地柄です。

*1：蚕を飼うために何段も重ねた棚

*2：蚕の飼育に用いられる長方形または円形の容器

2 蛹はワクチン製造希望の企業へ提供、繭はクラフトへ利用

駒ヶ根市では本プロジェクトに合わせて、福岡市にあるKAICO株式会社との間で、地方創生に向け、養蚕活用の連携協定を2024年3月に締結することができました。この締結に沿って2024年度に生産した約1万7千粒の繭を提供しました。同社は生きた蛹をワクチン製造に利用し、不要である繭層部分は駒ヶ根市（シルクミュージアム）へと返送されました。シルクミュージアムではこの繭層を使ってクラフト加工や真綿づくりなどへの利用を始めました。真綿の利用は初歩段階の状況ですが、繭クラフトはシルクミュージアムで長年行っている繭クラフト体験プログラムに携わるスタッフの技術による販売実績がありました。

本プロジェクトによって生産依頼が増えており、生産と販売体制の整備を急いでいるところです。

3 動態展示の実施

シルクミュージムではこれまでも夏場は桑葉、冬季は人工飼料を用いた生きたカイコの展示や、幼虫、卵の配布を通じ教育や市民の興味に応える取り組みを行ってきました。

新企画ではこれを充実し、卵・1齢から5齢期の幼虫・蛹（繭）・成虫を展示する動態展示を目標に取組みました。他の業務が忙しい時期を除き、2024年の5月から11月は生体展示を行うことができました。孵化直後の蟻蚕や2齢、3齢を見ることは初めての方が大半で、好評でした。成虫（蛾）が飛べないことを知る上でも良い展示となっています。

また、カイコには幼虫時期を中心に色や斑紋の変わった突然変異が多く存在します。これらの代表的な変異体の展示を九州大学の協力を得て行いました。

4 地域公民館、大日本蚕糸会等と連携した蚕糸に関する教育・普及活動

駒ヶ根市、特にシルクミュージアムがある東伊那地区は養蚕が盛んで、蚕糸業を通じたくらしや文化がありました。こうした地域で根ざしていた蚕業や文化を継承し、地域活性化へ繋げることを目標に地域の方々と2023年11月、「東伊那シルク研究会」を立ち上げました。

同メンバーが中心となり、2024年度には6回シリーズで「令和のカイコ教室」を東伊那公民館の講座として計画し、これまでに5回が終了しました。伸べ110名の方に参加を頂いています。



真綿作り（手作りの小型枠を利用）



繭クラフト（干支：辰）

内容は、
第1回「カイコの基礎知識を学ぼう」
第2回「カイコと薬」
第3回「カイコの育て方」
第4回「桑の効能」
第5回「繭クラフトを作ろう」
第6回「駒ヶ根シルクの歴史」
です。

実際のカイコを飼育する体験は養蚕、蚕糸への理解のために大きな効果があります。大日本蚕糸会が企画した「カイコを育てようキャンペーン」に2023年、2024年の2度参加しました。

育てたカイコの作った繭をシルクミュージアムで繭クラフト作り・座繰り・真綿の作成・糸染めなどの発展学習の場となりました。



桑パウダーで作った料理の試食（第4回公民館講座）※桑パウダーは、地元の営農組合が自前の桑畑で生産し、加工処理したものを利用しました。



桑パウダー入りのパンケーキ（第4回公民館講座）

今後の課題

- (1) カイコの飼育頭数の拡大には担い手の確保が不可欠です。桑畑の確保、桑畑の管理、カイコ飼育、繭を使ったもの作りなど、分野別に人材の発掘と育成が必要となっています。
- (2) また、繭を使った魅力あるもの作りとその販路の開拓も今後の課題です。

問合せ先



アルプスがふたつ映えるまち
長野県 駒ヶ根市
Komagane City

長野県 駒ヶ根市
駒ヶ根シルクミュージアム
伴野 豊

〒399-4321 長野県駒ヶ根市東伊那 482
電話：0265-82-8381
メールアドレス：banno@agr.kyushu-u.ac.jp



紡ぐ過去、繋ぐ未来 大音の糸取り物語

ながはま
滋賀県 長浜市

取組みの背景・経緯

1 賤ヶ岳麓の生糸の里

きのもとちょう おおと しずがたけ

木之本町大音集落は、賤ヶ岳の麓から湧き出る清浄な水に恵まれた地域で、平安時代の昌泰二年（899年）頃から養蚕業や製糸業が盛んに行われてきました。この地域は特に和楽器用の生糸の生産で知られ、昭和初期には全盛期を迎え、大音集落の約7割の住民がこの産業に従事するなど、地域の経済と文化の中心となっていました。



賤ヶ岳の麓にある木之本町大音集落

2 戦後の変遷

しかし、戦後になると化学繊維の普及が進み、また養蚕に携わる人々の高齢化も相まって、大音集落の製糸業は次第に衰退していきました。多くの家庭が代々受け継いできた技術を維持することが難しくなり、地域全体で製糸業の存続が危ぶまれる状況となりました。現在では、大音集落にある「佃平七糸とり工房」（住所：滋賀県長浜市木之本町大音975）のみが、伝統を守り続けています。

取組みの内容

1 当代4代目の職人

現在唯一残る工房を支えているのは、明治期から続く当代4代目の職人である佃三恵子さんです。彼女の存在が、この町の製糸業の命運を握っており、伝統を守り続けるために多くの努力を払っています。後継者の育成をはじめ、観光客への糸取りの実演、地元小学校での学習機会の提供など、多岐にわたる活動を行っています。

これにより、地域の若い世代や観光客に対して伝統的な生糸作りの技術を伝え、保存しようとしています。



工房での作業の様子

2 手間暇かける糸取り作業

生糸づくりに欠かせない繭は、春繭、夏繭、秋繭と一年間に3度収穫できます。このうち、強度が求められる邦楽器の弦に使用されるのは、最もしなやかで上質とされる春繭です。この春繭を使って、6月初旬から「糸取り」の作業が始められます。毎年6月には、よい糸が取れるとされる桑の新芽を食べた春繭が岐阜県美濃加茂市から届けられ、それをきっかけに糸取りの季節が始まります。

糸取り作業は70～80度の熱湯の中に繭を入れて、ほうきで糸口をたぐるという方法で行われます。現在

では窯のお湯をIHフッキングヒーターで沸かしていますが、昔は炭、その後はガスを使っていました。作業中に使用される水は、集落に引いてある賤ヶ岳の湧水であり、これが生糸の質を保つために重要な役割を果たしています。水道水を使用すると、カルキや消毒剤が生糸に悪影響を与えるため、湧水の使用が欠かせません。

糸取り工程は、約20個の繭からたぐり寄せた糸を「メガネ」と呼ばれる小さな穴に通し、「小車」と呼ばれる滑車までの間に1本の太い糸になるように糸によりをかけていきます。糸は「小枠」と呼ばれる道具に巻き取られ、こうして手間と時間をかけて生産された生糸が完成します。良質な繭は1つから1200メートルの糸が取れると言われており、この手間と時間をかけた行程が上質な生糸を生み出します。



熟練した技術による糸取り作業

3 地域一体となった取組み

手間暇かけて生産された生糸は、同じ木之本町にある特殊撚糸製造会社「丸三ハシモト株式会社」で琴糸、三味線、琵琶糸などの和楽器の弦に仕立て上げています。この和楽器の弦は国内外から評価をされています。



和楽器用の弦づくり

今後の課題とその解決に向けた方向性

製品への高い評価がある一方で、若い世代への伝承や労働力の確保が大きな課題となっています。他の地域ではなく、この大音で製糸業が続けられるよう、地域一体となった取組みが求められています。

地域の小中学校もこの伝統を次世代に引き継ぐために積極的な役割を果たしています。学校の社会見学として工房を訪れ、実際に糸取りの作業を見学する機会が設けられています。

児童・生徒たちは、歴史ある技術を間近で学び、その重要性や地域の伝統文化に対する理解を深めることができます。また、見学だけでなく、実際に簡単な作業を体験するプログラムも用意されており、児童・生徒たちが手を動かして糸取りを体験することで、より深い学びとなるよう工夫されています。糸取りの技術を目の当たりにし、地域の伝統文化に対する誇りを感じられるようになりました。



繰糸した生糸を巻き直す揚げ返し作業

このようにして、若い世代が伝統工芸に触れ、その魅力を感じる機会を提供することで、将来的な後継者育成や地域の活性化に寄与しています。社会見学を通じて、児童・生徒たちは地域の一員としての誇りを持ち、伝統を守り続けることの大切さを学びます。

以上のような包括的な取組みにより、製糸業の未来を支えるとともに、地域全体の文化的資産を次世代へと繋げていくことが期待されており、今後も継続して取組む予定です。

問合せ先



滋賀県 長浜市 産業観光部
商工振興課 商工労政係

〒526-8501 滋賀県長浜市八幡東町 632

電話：0749-65-8766

メールアドレス：syokou@city.nagahama.lg.jp



伝統産業の再構築と 新たな産業の創出を目指して



きょうたんご
京都府 京丹後市

取組みの背景

京丹後市は、京都府最北端の丹後半島に位置し、海、山、里の自然に恵まれている地域です。地域の特徴といえる湿度の高い気候が、絹織物の製造に適しており、隣接する与謝野町と共に「丹後ちりめん」という和装白生地の国内最大産地として、その歴史は1720年から始まり現在まで300年以上受け継がれ、当地域の伝統産業となっています。

本市における絹織物業の発展に向けた取組みとシルク素材等に着眼した取組みについて2例紹介させていただきます。

絹織物業

1 取組みの経緯

かつて当地域では、着物用の白生地を年間約1,000万反（1973年）生産していましたが、現在ではその規模も大幅に縮小し、最盛期に比べ2%以下の生産量となっている状況です。本市では、当地域の基幹産業でもある織物業の積極的なチャレンジを応援しようと丹後織物工業組合の取組みに対し支援を行っています。

同組合は丹後織物の現状を鑑みて、2022年に産業振興プランを策定し、翌年には、既存施設の再整備と同時に新たな機能を追加し、同組合の敷地全体を「TANGO OPEN VILLAGE(=TOV)」として再構築する構想を取りまとめました。

TOV構想は2027年までの5カ年で計画されており、その一環として2024年6月に精練加工を行う工程がオープン・ファクトリーとして一般公開され、丹後織物製品などを販売するショップと事業者同士の商談機能を併設した「TANGO OPEN CENTER(=TOC)」が

開設されました。令和6年12月時点で約2,000人の来場を記録しています。

2 取組みの効果

精練加工場のオープン・ファクトリーを中心としたTOCの開設により、丹後織物の特徴や技術力の高さに直接触れながら、同組合としては初となるBtoC向けの展示販売や施設スペースを利用したイベントを実施し、販売拡大や観光客を含めたファン・コミュニティの構築を目指しています。

また、バイヤーやデザイナー等プロ向けの商談に加工場の見学を組み込み、織物の価値が一層訴求された商品展開や新たなBtoBの販路拡大、その他関連産業への横展開等も進めています。

今後、来訪者が観光、買い物を楽しみながら滞在できる交流施設や「丹後ちりめん」の歴史・技術・文化等を包括的に学べる博物館、工場排熱を利用した農作物栽培等、約112,000 m²の広大な敷地一帯を2025大阪・関西万博以降も見据えた産業観光の拠点として再構築する構想が示されています。

3 今後の課題

TOV構想における当面の課題は、中核施設であるTOCの認知向上です。同組合として市内主要道路各所に看板を設置し、市内向けの広報を強化するとともに、市外へPRする重要な機会として毎年10月に同組合主催の「丹後織物求評会」にて広く情報発信が行われます。



TOV構想イメージ

また、今年度中に画像や動画、音声などデジタル・データの一元管理システムの導入が予定されており、織物の他、産業・観光・自然など本市がもつ様々な特徴や魅力を可視化したデジタル・データとの組み合わせが容易となり、産業観光の拠点として今後の広報戦略を担うシステムとして活用される予定です。

新シルク産業創造事業

1 取組みの経緯

蚕糸業の川上分野に着目すると、国内の養蚕農家数は年々減少し、また織物の原料となる生糸は海外からの輸入に依存していることから、絹織物業の代表産地である本市において、原料の確保は将来にわたって大きな課題の一つとなっています。

産業を維持し未来へ継承していくため、国産繭の安定的な確保に加え、生糸だけでなく繭やシルク素材の機能性に着目した新たな産業の創出を目指しています。

2014年5月に「養蚕業」に着目したプロジェクト提案が、国の「地域活性化モデルケース」に選定され、2015年から2016年には約4億円の設備整備費のうち地域再生戦略交付金（約2億円）の支援を受けて、廃校となった小学校跡地を拠点として「京丹後市新シルク産業創造館」を整備しました。

2017年からは、京都工芸繊維大学と連携のもと人工飼料を用いた無菌周年養蚕の基礎研究に取組み、施設設計上の上限とされる1サイクル20万頭の大量養蚕を行いました。

2021年からはその基礎研究の成果を活用し新たな産業の創出に向けたビジネスモデルの構築に関する業務等について、ながすな繭株式会社に対し業務を委託しています。

2 取組みの効果

2021年8月の委託業務開始以降は、本市から養蚕についての手法や技術の継承を進め、その後受託事業者においては全齢人工飼料による商業的養蚕体制が確立されるとともに、繭やシルク素材の機能性に着目した新たな産業の創出に向けて研究・開発に取



2021年時 事業化予定モデル

組んでいます。

民間事業者独自のノウハウにより、スポンジやフィルム、ゲル、粉末、水溶液等といった新しいシルク素材の原料開発と、化粧品や食品、医薬品等の付加価値性の高い用途向けの製品開発が行われています。また、繭やシルクだけでなく副産物となる蛹の活用についても実装が見込まれています。

養蚕体制においては一部でワーキッシュ・アクトが導入され、主に市民の方に従事いただいております。かつて当地域では養蚕業を営む家庭も多かったことから懐かしんでいただいております。また市内小学校向けに4歳から繭に至るまでの過程に触れられる飼育体験セットの提供やSNSを活用した情報発信を行い、養蚕を通して本市の伝統産業である織物をより身近なものとして愛着を抱いていただけるよう努めています。

3 今後の課題

本事業については、事業化に向けた繭の生産コスト低減と高付加価値化による出口戦略の確立が引続きの課題です。

コスト低減に向けては、養蚕の省人力化が計画されています。また低コスト人工飼料の開発も進められており、受託者独自の人工飼料は購入品飼料比約6割のコストカットが見込まれています。

高付加価値化については、従来のシルク分野にはない新しい分野として高付加価値ビジネスモデルの展開も構想されており、またSDGSの推進にも大きく寄与されるものとなっています。

現状は卵のような構想の域ではありますが、いずれ羽化し、国内ひいては世界へ羽ばたく可能性を秘めています。

活用した助成事業等

地域再生戦略交付金

問合せ先



京丹後市
Kyotango City

京都府 京丹後市
商工観光部 商工振興課
白岩 潤喜

〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 385-1
網野庁舎（ら・ぽーと）

電話：0772-69-0440

メールアドレス：shokoshinko@city.kyotango.lg.jp

日本近代養蚕業の父、上垣守国と 養父市養蚕プロジェクト事業



やぶ
兵庫県 養父市

取組みの背景

養父市は、兵庫県北部にある但馬地域のほぼ中央に位置し、市面積のうち84%を森林が占めている中山間地域です。

養父市出身の偉人には、「日本近代養蚕業の父」と言われた上垣守国う え が き も り く にがいます。上垣守国は1753年（宝暦3年）に出石藩が治める大屋の蔵垣いずしはん（現養父市大屋町蔵垣）に生まれ、18歳のときに、陸奥国福島地方を訪れて先進地の養蚕を学びました。その後、故郷である但馬や丹波地方で養蚕の普及を行いながら、1803年（享和3年）に「養蚕秘録」という養蚕の指導書を出版しました。この書物は、出版から45年後にフランス語に翻訳されてパリで出版され、ヨーロッパの養蚕技術の改良に寄与しました。また、明治期にも養蚕の教科書として読み継がれ、長きにわたり日本の近代的な養蚕業の発展に貢献しました。

その後、上垣守国の生誕地である養父市（旧養父郡）は、明治から昭和にかけて兵庫県下で最も養蚕が盛んな地域として養蚕業と製糸業が栄えました。そして1995年には、大屋町蔵垣地区に「上垣守国養蚕記念館」が開館しました。昭和初期の養蚕農家住宅を再現した建物には、「養蚕秘録」をはじめ、生糸や繭、養蚕に関する書物や蚕具、農林用具などの資料が展示されています。



上垣守国が出版した養蚕秘録



上垣守国養蚕記念館

また、2005年には同敷地に「かいこの里交流施設」が開館し、養父市の養蚕業の歴史や繭を使った繭人形の展示、座繰り器を使った糸取り体験等を行うほか、養蚕へ興味関心を広げるための地域交流イベント「守国かいこ祭り」を毎年6月に開催し、養蚕文化を後世に伝承しています。

2024年には、養父市教育委員会が上垣守国の生涯を題材としたマンガ書籍を養父市出身の漫画家コンタロウ氏に執筆を依頼して発行し、市内の小中学生に配布し授業等で活用しています。

米作りとともに養蚕が盛んであった養父市では、明治時代中期から昭和中期にかけて、養蚕に適した3階建の養蚕農家住宅が多く建てられました。特に大屋町大杉地区では、養蚕農家住宅を中心とする土蔵や納屋などの伝統的建造物群や谷川に沿って形成された集落の景観が地域の特色をよく表しており、そのことが日本の養蚕集落として高く評価され、2017年に国の重要伝統的建造物群保存地区（山村・養蚕集落）に選定されました。現在、大杉地区では養蚕農家住宅を活用した古民家の宿やギャラリーがあり、地域全体で多彩な交流を推進しています。



大屋町大杉地区にある三階建養蚕農家住宅



上垣守国を題材としたマンガ書籍

取組みの内容（経緯）

かつて盛んであった養蚕業を継承し、現代の産業として復活させるため、養父市では2016年から「養父

市養蚕プロジェクト事業」を開始しました。本事業では、行政と養蚕農家、企業、就労継続支援B型事業所などが連携し、蚕の飼育施設や桑畑の整備を行いながら、市内における養蚕業モデルの確立に取り組んでいます。また、蚕の蛹さなぎを活用して商品を製造している製菓会社と連携協定を締結し、養蚕業を含む地域産業の振興などを推進しています。

2021年からは養蚕プロジェクト事業の担い手として地域おこし協力隊を募集しており、これまで2名の隊員を採用しました。そのうち1名は隊員を卒業後、市内でシルク製品の販売などに取り組んでいます。2022年4月から地域おこし協力隊に採用された愛知県出身の石井明日香隊員は、蚕の多頭飼育や蚕の蛹の販路開拓に挑戦しているほか、前述のかいこの里交流施設において展示用の蚕を飼育するなどして養蚕文化の普及・啓発を行っています。石井隊員は、大日本蚕糸会の研究機関である蚕糸科学技術研究所で新規養蚕就農者らを対象にした技術研修に参加するなど、積極的に飼育技術の習得に励み、隊員となった当初、1万頭未満であった飼育頭数は、2024年には約1万5000頭となるなど着実に成果を積み上げています。将来的には養蚕の担い手として自立するため3万頭の飼育を目標として日々養蚕業の推進に取り組んでいます。



一般企業による桑畑の整備



地域おこし協力隊による蚕の飼育

- 1753年 大屋の蔵垣に上垣守国が出生
- 1803年 上垣守国が養蚕秘録を出版
- 1897年 兵庫県蚕業学校が八鹿に創立
- 1995年 大屋町が上垣守国養蚕記念館を開館
- 2005年 養父市がかいこの里交流施設を開館
- 2016年 養父市が養父市養蚕プロジェクト事業を開始
- 2017年 大屋町大杉地区が国の重要伝統的建造物保存地区（山村・養蚕集落）に選定
- 2021年 養父市が養蚕プロジェクトの担い手として地域おこし協力隊の採用を開始
- 2024年 養父市教育委員会が「マンガふるさとの偉人上垣守国」を発行

取組みの効果

毎年開催している「守国かいこ祭り」では、市内外から多くの来場者が訪れ、地域間交流が図られています。また、学校では、かいこの里交流施設での蚕の飼育施設見学や上垣守国を題材とした書籍の活用を通じて、養父市らしい特色のある郷土教育を推進しています。



守国かいこ祭り



児童による蚕の飼育施設の見学

今後の課題とその解決に向けた方向性

養蚕業の復活を目指して開始した「養蚕プロジェクト事業」ですが、市内における養蚕業モデルの確立は難しく、現時点では新たな産業の創出に苦慮しています。これまで、市内の一般企業や就労継続支援B型事業所と連携して蚕の飼育施設や桑畑の整備に取り組んできましたが、飼育効率や販路の確保に課題があります。

今後は、市内における養蚕就農者や桑の葉の生産者、生糸販売者など直接養蚕業に携わる方だけでなく、養父市の養蚕の歴史を伝える語り部やそれを学び興味を持っていただける方など、個人や企業を問わず、市内外で養蚕業に携わる多様な担い手を増やしていきたいと考えています。また、有識者や研究機関、養蚕先進地と連携しながら、担い手の飼育技術の習得や販路の拡大を図りながら、養父市における養蚕業モデルの確立を目指していきます。

活用した助成事業等

- (1) 地方創生推進交付金事業（国庫）：養蚕施設整備
- (2) ふるさとゆかりの偉人マンガの製作と活用事業（B&G財団）

問合せ先



養父市 Yabu City

兵庫県 養父市
経営政策・国家戦略特区課
藤原 将司

〒667-8651 兵庫県養父市八鹿町八鹿 1675
電話：079-662-7602
メールアドレス：kikakuseisaku@city.yabu.lg.jp



いよいと 伊予生糸をつなぐ



せいよ
愛媛県 西予市

取組みの背景

西予市は、愛媛県の南西部に位置し、2004年に東宇和郡の4町と西宇和郡の1町が合併し誕生しました。古くから蚕糸業の盛んな地域で、なかでも旧野村町は、昭和期には県下最大の組合製糸工場があり、県内一の繭生産量と生糸生産量を誇りました。愛媛県で生産される生糸は、伊予生糸と呼ばれ、古くから高品質な生糸としてエリザベス女王戴冠式や伊勢神宮式年遷宮の御料糸^(*)として珍重されてきました。しかし、農家の高齢化による原料繭の減少や生糸価格の低迷により、平成6年に県内工場がすべて操業停止となつてしまい、地域の発展に貢献した蚕糸業と伊予生糸を後世に伝えたいとの思いから、引き継ぐように野村シルク博物館が開館、製糸部門を併設し、蚕糸業振興の拠点として魅力ある蚕糸業を目指して活動しています。

*1：祭祀に供えられる織物のための生糸



西予市で唯一生産される伊予生糸



養蚕・製糸の活動拠点、西予市野村シルク博物館

取組みの内容（経緯）

養蚕農家の高齢化が顕著となり、伊予生糸の産地消滅の危機感が高まったことから、関係機関で伊予生糸産地再生協議会を立ち上げ、産地の将来像の検討をはじめるとともに新規養蚕者の掘り起こしと育成を進めてきました。

2014年 伊予生糸産地再生協議会発足、産地の将来像の検討開始

2015年 中古養蚕機器の収集保管提供開始
新規養蚕者向け優良桑苗の生産事業開始
繭代農家手取り1kg当たり4,050円に引き上げ

2016年 地理的表示保護制度（GI）に「伊予生糸」認証登録



地理的表示保護制度「伊予生糸」認証授与式

旧稚蚕共同飼育施設を活用し、30年ぶりに新規養蚕者誕生・飼育開始

2017年 新規養蚕者2番目誕生・飼育開始
 2018年 西日本豪雨、桑園に土砂流入等の被害
 2019年 愛媛シルク協議会発足、蚕糸業以外ながらシルクに関心のある企業との交流
 2020年 新規養蚕者3番目誕生・飼育開始
 2021年 シルクサミット in 愛媛「伝統と革新」開催
 織度2.5d以下、糸長 1,500m以上の細織度
 優良繭1kg当たり300円加算開始
 2022年 文化財修復用生糸受注生産開始
 2023年 養蚕対象地域おこし協力隊員着任、養蚕イン



養蚕インターンシップ、新しい蚕室で活躍する面々



養蚕インターンシップ、桑園での桑摘みの様子

2024年 西予シルク協議会発足活動開始、耕作放棄桑園の再生管理に着手

取組みの効果

1 経済的效果

伊予生糸がGI認証を受けたことにより、認知度が高まり、新規農家の掘り起こしや地域観光の集客につながりました。

新規農家の蚕舎建設、桑園造成を博物館隣地に誘致できたことで、養蚕の動態展示や養蚕体験が可能となり、博物館の展示機能が向上しました。

シルク協議会を通じてシルクに関心のある蚕糸業以外の企業との交流が活発となり、製糸過程で排出される副蚕糸類の有効利用が図られました。

2 社会的効果

伊予生糸がGI認証を受けたことにより、地域住民の

理解が深まり、西予シルク協議会等の協力体制が構築されました。

3 文化的効果

地元高校の地域歴史教育や野外実習に養蚕が活用され、若者にも理解が深まりました。

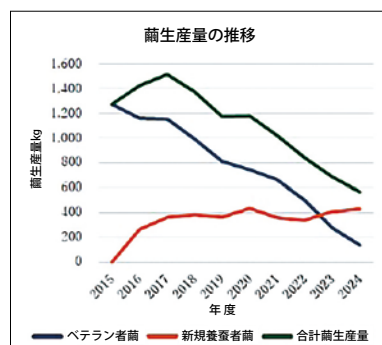
京都西陣や文化財の修復に伊予生糸が使用されていることから、地域の文化はもとより日本の絹文化を支えていることが理解されました。

今後の課題とその解決に向けた方向性

新規養蚕者は、家族経営ではなく、兼業一人経営なので、規模拡大が進まず生産量が伸び悩んでいます。

養蚕インターンシップを定期的に行い、養蚕への理解者や協力者を増やすとともに新規養蚕者の掘り起こしを推進します。

最近の夏季高温少雨は、夏秋蚕期の作柄を著しく低下させており、飼育環境改善のため新規養蚕者を中心に巡回指導を強化します。

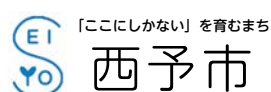


繭生産量の推移

活用した助成事業等

- (1) 2014～ 養蚕振興対策事業（西予市）
- (2) 2014～2015 伊予生糸ブランド化推進事業費（愛媛県）
- (3) 2016～2017 新規養蚕参入者支援事業（大日本蚕糸会）
- (4) 2019 条件整備事業（大日本蚕糸会）
- (5) 2024 山村活性化交付金（国）

問合せ先

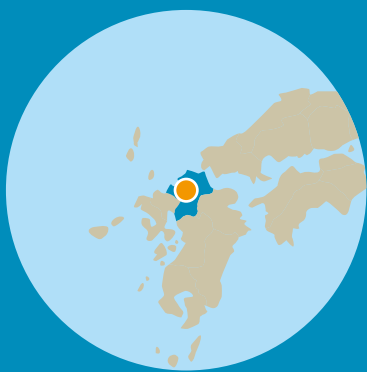


「ここにしかない」を育むまち

西予市

愛媛県
 西予市野村シルク博物館
 密田 和彦

〒797-1212 愛媛県西予市野村町野村 8-177-1
 電話：0894-72-3710
 メールアドレス：kazuhiko.mitsuda@city.seiyo.ehime.jp



ちくしぐん

筑紫郡大野村の養蚕



おおのじょう
福岡県 大野城市

取組みの背景

1 蚕業の歴史

大野城市は福岡平野の最奥部に位置し、福岡市の南東部に隣接しています。養蚕や絹糸に関連する考古資料としては、福岡県指定史跡の善一田古墳18号墳(6世紀後半)で「箴目^(※1)の平絹^(※2)」と「経錦^(※3)の絹糸」の痕跡がある盛矢具が出土しており、石勺遺跡では「蚕」と墨書された平安時代の土器も見つかっていることから、古くから養蚕や絹糸の生産が行われていたと考えられます。

明治時代以降、大野村(現在の大野城市)を含む筑紫郡では朝倉郡から専門家を招き、火力を使用した養蚕術や座繰の方法を養蚕農家に普及させる取組みを行いました。1904年、筑紫郡内に3ヶ所の稚蚕共同飼育所が開設され、養蚕農家の上繭歩合は飛躍的に上がり、筑紫郡は福岡県内で朝倉郡、八女郡に次ぐ生産規模になりました。1923年、大野村の農家の約半数にあたる235戸が副業として盛んに養蚕を行い、年間46トンの繭を収穫しました。大野村には1928年に福岡県蚕業試験場、1935年に福岡県繭検定所が設置されました。それらの施設があった場所に建つ大野

城市役所の前には一本の桑の木が記念樹として植えられています。

市内に養蚕農家は一軒もありませんが、大正時代初期に建てられた蚕小屋が一軒、現存していることが2023年に確認されました。このほか、大野城心のふるさと館では養蚕を紹介した冊子の刊行や蚕糸業に関わる民具や文献資料の収蔵、展示を行っています。

*1: 織物の経糸の密度
箴とは、織物の経糸を揃え、緯糸を押し詰めて織り目を整えるための、くし状の道具

*2: 経糸と緯糸を交互に織り込んだ絹織物

*3: 経糸に色糸を用い、単色の二種の緯糸で文様を織り出していくもの

2 産業基盤

明治時代、大野村で収穫された繭は雑餉隈や二日市の生繭市場を経て、山十や郡是、片倉等の製糸工場で生糸に加工され、その一部は博多織の原材料になりました。

第2次世界大戦後、大野町には次々と博多織工場が開業したことに由来する「錦町」の地名がつけられました。現在も市内の御笠川沿いに(株)はかた匠工芸と(有)協和織工場の2軒の博多織工場があり、国の伝統民芸品「博多織」を生産しています。



筑紫郡蠶業地図



大野城市役所前の記念樹「桑の木」

取組みの内容（経緯）

2009年1月20日～3月10日

大野城市歴史資料展示室
特別企画「養蚕民具展」開催

2018年7月21日

大野城心のふるさと館開館収蔵展示「織の風景」
※2年に1回程度、不定期開催
大野城タイムライン近現代コーナー（常設展示）

2023年9月1日

蚕小屋（現在は納屋として使用中）の測量調査実施

2023年9月26日～11月5日

大野城心のふるさと館開館5周年記念
「大野村のおかいこさま展」開催

2023年10月25日

博多織工場見学会
（「大野村のおかいこさま展」関連イベント）

2024年7月31日

博多織工場見学とワークショップ
（「第30回世界少年野球大会福岡大会」関連イベント）



大野村のおかいこさま展



収蔵展示「織の風景」

取組みの効果

2023年、「大野村のおかいこさま展」関連イベントで実施した博多織工場見学会は、募集定員に対して

市内外から1.5倍の応募があり、関心の高さが伺えます。

2024年、第30回世界少年野球大会福岡大会では博多織工場見学とワークショップ（博多織の生地を使用した缶バッジまたはポストカードの作成）を開催し、国内外から参加した子ども達に博多織の歴史や魅力を伝えることができました。

このような取組み以降、最近では養蚕や蚕糸業に関する問合せが増えています。

今後の課題とその解決に向けた方向性

2023年に調査を実施した蚕小屋の所有者が、養蚕の歴史を活かしたカフェやコミュニティルーム等の活用を模索中です。

大野城市では2024年から指定・未指定文化財の現況調査を実施しており、養蚕関連の建造物や関連資料の把握をさらに進めていきたいと考えています。

参考文献

『筑紫郡の蠶業』

筑紫郡蠶業組合 1924年

『大野城市史』下巻

近代・現代編大野城市史
編さん委員会 2004年

『大野城市の養蚕』

大野城市の文化財第41集
大野城市教育委員会
2009年

『民具（養蚕に使った道具）』

解説シート民俗 NO.25
大野城市教育委員会 2009年

『乙金地区遺跡群 23』＜中巻＞

大野城市教育委員会 2017年

『ふるさと文化誌 大野城まち物語』第12号

福岡県文化団体連合会 2024年



『筑紫郡の蠶業』
筑紫郡蠶業組合発行

問合せ先



福岡県 大野城市
大野城心のふるさと館 文化財担当
山村 智子

〒816-0934 福岡県大野城市曙町 3-8-3

電話：092-558-2209

メールアドレス：furusato@city.onojo.fukuoka.jp

企画・編集：一般財団法人 大日本蚕糸会

URL <https://silk.or.jp>

〒100-0006 東京都千代田区有楽町 1-9-4 蚕糸会館 6 階

TEL 03-3214-3500

協力：シルクのまちづくり市区町村協議会

URL <https://silktown.jimdofree.com/>

発行日：2025 年 3 月



一般財団法人
大日本蚕糸会
The Dainippon Silk Foundation